市立函館博物館

研　究　紀　要

第２５号

2015

市立函館博物館

研　究　紀　要

第２５号

２０１５

序

このたび『市立函館博物館研究紀要』第25号を刊行する運びとなりました。

本号は、北海道立アイヌ民族文化研究センター主幹小川正人氏の「函館と近代アイヌ教育史ー谷地頭にあったアイヌ学校の歴史ー」、北海道開拓記念館学芸員春木晶子氏の「市立函館博物館所蔵〈アイヌ風俗絵馬〉について」、当館学芸員大矢京右の「北洋博覧会のアイヌ館」の３題を掲載いたしました。

小川氏は長年近代アイヌ教育史について研究されており、今回は明治期に函館で開校されていたアイヌ学校の歴史について考察されています。春木氏はアイヌ絵を中心に北海道の美術史を研究されており、今回は当館所蔵のアイヌ風俗絵馬と上ノ国町の上ノ国八幡宮所蔵の絵馬を比較し考察されています。大矢学芸員は、昭和29年に開催された北洋博覧会で、旧函館博物館２号を会場に設置されたアイヌ館について調査・紹介しています。今号の３題は、「アイヌ」をキーワードに、函館との関係および当館が所蔵する資料に関する研究成果であり、改めて函館とアイヌのひとびととの関係などを考える上で役立つものと考えられます。

終わりに、これらの研究論文等が、今後、幅広く利用、活用されることを期待いたしますとともに、関係各位におかれましては、当館に対しまして忌憚のないご意見・ご提言をいただくようお願い申し上げます。

平成27年３月31日

市立函館博物館長
阿　部　　司

― 目　次 ―

序

函館と近代アイヌ教育史

―谷地頭にあったアイヌ学校の歴史―

小川　正人……1

〈資料紹介〉

市立函館博物館所蔵〈アイヌ風俗絵馬〉について

春木　晶子……22

〈研究ノート〉

北洋博覧会のアイヌ館

大矢　京右……28

函館と近代アイヌ教育史
－谷地頭にあったアイヌ学校の歴史－

小川　正人

１．はじめに

1-1.　「谷地頭のアイヌ学校」

岡田健蔵の文章から

函館図書館（現函館市中央図書館）の創設者であり郷土史家でもあった岡田健蔵は、雑誌『函館評論』(のち『函館』)に連載した「函館史実」の中で、「日本最初のアイヌ学校と其校長」と題して、聖公会が函館に設立した、アイヌの児童・青少年を対象とした学校を紹介している。

以下に、その主な部分を引用する。

> アイヌ研究とか旧土人保護とか又旧土人教育など云ふ様な事は我が函館には殆んど没交渉の感があり今日の函館人には夢の様にも思はれるであらうが、明治11年には彼の英人ジョンバチラー氏がアイヌ研究に着手し、遂に幾多のアイヌ語聖書の翻訳蝦和英対訳辞書の刊行、蝦夷今昔物語、アイヌ人と其説話アイヌ語地名考等の研究が発表されたのも我が函館が出発点である。又土人教育に於ても明治25年11月に元町7番地に英人ネトルシップ氏監督教会附属の事業として創設したのが我邦土人教育学校の最初である。其後公園の側に一時移転したが26年に谷地頭(碧血碑下)に校舎を新築して移った。高等尋常の小学課程に準じて其他には羅馬綴や聖書の講義なども加へ校長にはネトルシップ氏がなり教鞭は金岩捨次郎氏が採った。明治31年の在校生が18名で其中には伝道学校に通学のものが4名あったと函館沿革史に書いてある。其廃校年代は不明である(函館区史に記載なし)。此ネトルシップ校長は又我が函館の運動界に忘るべからざる功労者である。氏が当時の中学生に初めて野球競技を教へた事、又ホッケーの(函館人はアヌベスと云ふ)競技を市民に知らせたことなどあるが、当時如何なる事情であったか市内の某新聞がネトルシップの官林盗伐事件と題して数日に批難攻撃の記事を連載したので、函館が厭になり亜米利加に間もなく引揚げた、今は之も昔語である。〔後略〕[1]

当時の文章には多く見られることとはいえ「土人」という語が頻出するし、表題にいう「日本最初の」は正確とは言えない[2]。また、「廃校年代は不明」としているが、後述するとおり、1905年に閉鎖になったことが確認できる。このような幾つかの問題を含んでいるとはいえ、それらを差し引けば、この文章は、短い紙幅で学校の沿革や逸話などをまとめており、この学校の概要を知ることができる文章が現在でも極めて乏しい中では、依然として重要な位置を占めていると筆者は考えている。

本稿の対象は、ここで岡田が紹介した、聖公会によるアイヌ学校である[3]。

谷地頭のアイヌ学校への着目

筆者がこの学校に着目する理由は二つある。

一つは、この学校が、1890年代の北海道で一定の広がりをみた聖公会によるアイヌ学校の一つであること、その中でも、比較的長い年数存続し、かつ、他の聖公会のアイヌ学校が小学校であったことと比べ、年長の青少年も在学し伝道者養成の役割を持っていた（少なくとも、そのことが目指されていたと推測できる）ことである。

もう一つは、この学校が、函館という、統計上は近代初頭において既に市街にも近隣にもアイヌ人口をほとんど確認できないところに設置されたことである。岡田が、上掲の文章の中で、「今日の函館人」にとって、「アイヌ教育」などは「殆んど没交渉の感」「夢の様にも思はれるであらう」と述べたのは、この点に関わる示唆的な議論ではある（ただし、この文脈からすれば、岡田のいう「今日の函館人」には、おそらくアイヌは含まれていないことには留意しておくべきだ）。岡田の文は、これらの「函館人」にとって、〈アイヌ〉とは、近世以前の歴史の中、地理的に函館からは離れた地域、あるいは博物館に収蔵された資料などにおいて接するものであり、同時代に同じ社会を生きる存在としては認識されにくくなっていると述べているのだと、筆者は受け止めている。では谷地頭のアイヌ学校の歴史を調べ・知ることで、この問題はどのように考えることができるのか。この点についても筆者なりの考察を試みたいと考えている。

1-2. 先行研究の総括

『函館市史』における前進

『函館市史』には、岡田健蔵からの前進を確認できる。

通説編第２巻第４編「箱館から近代都市函館へ」の第10章「学校教育の発生と展開」に、「もう一つの学校教育“慈善教育”」と題した項目があり、ここに「アイヌ学校」の記述がある。記述を抄録すると以下のとおりである。

> アイヌ学校
>
> キリスト教の布教活動の中では、教育や慈善事業が大きなウエイトをしめているが、〔中　略〕その中で聖公会はアイヌへの伝道活動に力を入れていた。特に「アイヌの父」といわれた司祭ジョン・バチェラー(John Batchelor)は、当時教育行政から見捨てられていたアイヌのために、幌別の愛隣学校をはじめとした教育施設を全道に開設した。
>
> 「札幌には仕事のために一番遠い場所からも、しばしばアイヌがやって来ますが、函館では一年中アイヌを見ることがありません」(仁多見巌訳編『ジョン・バチェラーの手紙』)とバチェラー自身が報告している函館にもアイヌ学校が開設された。これは、幌別の愛隣学校が居留地問題で取り壊し命令を受けたため、その代わりとして25年に元町に開設したもので、同じ聖公会の宣教師で教育者であったネトルシップ(Nettleship)師が校長となった。
>
> 翌26年には谷地頭に校舎を新築している(『函館沿革史』、ジョン・バチェラー『我が記憶をたどりて』)。
>
> 32年の同校の概況は、生徒は予科11人・本科4人の15人で、学業は「追々進歩し」、「運動会等の催しなく毎日フートボールの類を課」したということである(河野資料「函館資料三」道図蔵)。
>
> また14歳以下の子どもを収容する付属育児院も併設されており、当時14人の子どもが収容されていた。
>
> この函館のアイヌ学校は、その後も20名前後の生徒が在籍した(『函館市史』統計史料編)が、37、8年頃に廃校となった[4]。

基本的な内容こそ岡田の文章と同様であ

る[5] が、この学校をキリスト教によるアイヌ教育活動の一環に位置付け、この活動を当時の教育行政から「見捨てられていた」アイヌに対する活動すなわち行政にとって対抗的な位置を占めたと示唆していること、函館に学校が設立されるまでの経緯として幌別の「愛隣学校」に触れていることなどが、岡田の文章からの前進である。

聖公会のアイヌ学校に関する研究

キリスト教の教派・伝道者によるアイヌに対する活動は、早い例では1880年代から聖公会を中心とした動きを確認できる[6]。1890年代には、北海道内の聖公会によるアイヌを主な対象とした教育・伝道施設は10箇所近くにのぼり、それが行政に少なからぬ“脅威”を与えるに至っている（このことについては後述する）。

しかしながら、これまでのところ、キリスト教アイヌ教育については、多くの著作は概説的にその歴史を述べるにとどまり、釧路の春採などごく一部を除けば、具体的な学校の実態はほとんど明らかにされていない[7]。筆者自身の近代アイヌ教育史の勉強も、先ず政府・道庁などによる制度・政策の展開過程とその実態を対象としてきたのであり、キリスト教アイヌ教育については副次的に触れてきたにとどまる[8]。

このような中で着目すべき近年の研究に、クリストファー・フライ（Christopher J. Frey）によるインディアナ大学学位論文「AINU SCHOOLS AND EDUCATION POLICY IN NINETEENTH-CENTURY HOKKAIDO, JAPAN」（2007年）がある。この論文は、近世から「北海道旧土人保護法」(1899年)までのアイヌ教育を通観したものであるが、聖公会のアイヌ教育に着目している点が特徴の一つとなっており、Chapter7「The Hakodate Ainu Training School and the CMS Ainu Charity Schools」において、函館のアイヌ学校をとりあげている。この論文の特色の一つは、これまでの日本国内の研究ではほとんど活かされてこなかったイギリス聖公会のアーカイブの調査を踏まえていることであり、函館のアイヌ学校についても、ネトルシップが記録した同校の時間割や、同校生徒が春採（釧路）の聖公会のアイヌ学校に3ヶ月間の“実習”に派遣されていたことなどの重要な資料を紹介している。同論文は、同時代の他の聖公会のアイヌ学校にも触れつつ、聖公会が同校をキリスト教アイヌ教育の担い手の養成機関として位置付けていたことに着目し、その歴史を追跡している。

本稿の課題

筆者自身、これらキリスト教のアイヌ学校について、いつまでも"後回し"にしておいてよい課題ではないとは考えてはいた。とりわけ筆者が近年意識するようになったのは、これらの私立学校が一定の就学者を確保していた時期、言い換えれば、少なくないアイヌが私立学校を選択していた時期に、その実態を解明することである。それは、アイヌにとっての近代教育史の問題、とりわけ、学校・教育に対する要求のあり方、在処、…といった問題を考える手がかりになるのではないだろうか。

本稿は、かかる問題関心のもとに、函館のアイヌ学校の歴史を検討する。ただ、この学校について残されている資料は今のところ極めて乏しく、例えば校舎の写真や図面なども、今のところ筆者は確認できていない。同校の歴史をある程度まとめて報告するには、なお尚早だと認めざるを得ないが、先ずはこれまで調べ得た限りで、沿革を概観するとともに、同校の実態に関する諸側面を点描しながら、設定した課題についての考察を提示したい。

なお、本稿が対象とするこの学校の名称

は、資料により「函館土人学校」「函館愛隣学校」「函館伝道学校」などと異なっており、今のところ筆者には確定することができない。差し当たり本稿では、「谷地頭のアイヌ学校」あるいは「函館のアイヌ学校」とする。

2．学校の沿革

先ず学校の設立から廃止までの沿革を概観する。

2-1. 設立までの経緯とその背景

1890年前後のアイヌ教育政策

先ず、谷地頭の学校設置の直前、1890年代初頭のアイヌと学校教育とに関わる状況について概観しておく[9]。

筆者が押さえておきたいのは、この時期から北海道各地への大規模な移住民の流入が進行したことと[10]、その一方で、初等教育など地域住民の生活基盤の整備に関わる経費を大幅に節減し、アイヌ教育についても徹底して経費を削減したことである。

例えば、1882年、函館県が遊楽部（現八雲町内）にアイヌ学校を設置している。1880年には札幌県が平取に、1885年には根室県が白糠に、それぞれアイヌ学校を設置しており、遊楽部の学校設置は、この時期、行政がアイヌ教育に対して一定程度は積極的な姿勢を見せていたことの一環だと位置付けることができる。しかし翌年、函館県は同校を八雲村に移管し、同校の財政的な基盤はとたんに脆弱になった[11]。さらに、1886年の三県廃止・北海道庁設置後、政府・北海道庁は、初等教育の経費の大幅な節減に踏み切り、1887年には小学校に対する補助金を全廃した。このため遊楽部の学校の経営も極めて厳しくなり、一時的な休校も余儀なくされている[12]。道内全域を見ても、1886年以降、行政による新たなアイヌ学校の設置はしばらく“中断”する。

道内各地のアイヌにとって、この時期の大規模な「開拓」の進行は、これまでの生活文化の基盤が大きくゆらぐことでもあった。それだけに、新たな時代に向けて、子どもたちに新たな時代の学問を身につけさせることが切実な選択肢になったと推察できる。しかし行政の姿勢は、かかる切実さに応えるものとは言いがたい[13]――この時期のアイヌとアイヌ教育政策との関係は、このような状態にあった。次に触れるキリスト教伝道者による活動は、かかる“素地”の上で展開する。

キリスト教伝道者によるアイヌ教育活動

1870年代以降、キリスト教伝道者が函館や札幌などの市街地を中心に北海道の各地で活動するようになる。それらの中でアイヌに対する布教に最も熱心だったのがイギリス聖公会であり、その中心を担ったのがジョン・バチラー（1854～1944）である。

バチラーは1877年に初めて北海道に来て以降、1941年にアジア・太平洋戦争が激化したため離日するまで、一時的に帰郷した時期を除き、北海道でアイヌに対する布教、教育、社会事業などに従事した。

聖公会が最初に設けたアイヌ児童を対象にした学校は、1888年に胆振の幌別村に設置した愛隣学校である。その後、この函館のほか、釧路地方の春採（1891年設置）、塘路（1895年）、白糠（1897年）、十勝地方の白人（1896年）、日高地方の新冠（1898年）などに学校を設置している[14]。このほか日高地方の平取などに設けた講義所でもアイヌに対する布教を行ない、1897年には平取が属する日高の沙流郡だけで230名の信者を獲得したという[15]。行政によるアイヌ教育が“停滞”する一方で、聖公会によるアイヌ教育活動が急速に“普及”していく、という構図を見ることができる。

キリスト教の教育活動に見られる行政と

異なる特徴として、布教にアイヌ語を用いたことを指摘できる。1897年にはアイヌ語の新訳聖書が発行されており、日本聖公会北海教区の機関誌『北海之光』の当時の号がアイヌ語の賛美歌を掲載していることなどは、その一端を示す。勿論、実際のところアイヌ語の使用がどの程度のものだったのか、また、アイヌ語を用いることが相当な留保が必要ではあるものの[16]、同時期の行政にはかかる要素は先ず見られないこととは、大きな差異があったと見るべきだろう。

実際、当時の教育雑誌には、「アイヌ教育の事たる、邦人の冷淡なるより、其教育の大半は、外人の宗教家に委したるが如し」[17] といった議論をしばしば掲載している。こうした議論は、外国人に対する危機感を強く主張するため大袈裟な物言いになっているであろうことを差し引いても、キリスト教のアイヌに対する布教が、一定の広がりを見せている、少なくとも、当時の日本の教育行政の関係者にはそう見えていることをうかがわせる。

幌別の愛隣学校

函館に先立って聖公会が設けたのは、前述した幌別の愛隣学校である。のち函館の学校の校長となるネトルシップは、当初ここに赴任した。当時の新聞記事は、「英人ネトルシップ氏の如きは都合によれば永住せらるゝやも」[18] とも記しており、この時点での聖公会の同校に対する力の入れようが窺える。

しかし、このときはいわゆる条約改正前であり、外国人が定住できる場所は制限されていた。このため、外国人宣教師を教員とした学校を幌別で維持することは困難だった。詳しい経緯は明らかにできなかったが、聖公会がこのとき函館に学校を設置した背景には、函館が当時の聖公会の活動の拠点の一つだったということに加え、幌別の学校では外国人宣教師が教育に従事することが困難だったという事情があったものと推測できる。

2-2. 函館への学校設置

1892年、聖公会は、函館の元町にあった教会内に学校を開設した。当時の教会の住所は元町７番地で、現在の元町の高橋病院の裏手のあたりになる。

当時の地図を見ると、道路を挟んだ向かい側に函館商業学校がある。想像をたくましくすれば、二つの学校の生徒が、このあたりの道路で顔を合わせていた可能性がある。

翌1893年、学校は谷地頭に移転する。このときから独立した校舎を備え校地を有したようなので、前年の元町での設置はそれまでの暫定的なものと推測できる。

谷地頭での学校の所在地については、当時の地図に「土人学校」と記入されているところからおおよその位置は確認できるものの、地図によってその位置が異なっている場合もあり、校地全域を確定できるには至っていない。ただ、後年（1925年）の新聞に「谷地頭四三番地」の家屋を「元アイヌ学校跡」と述べる記事があり、当時の地図と照合すると、函館八幡宮境内に隣接する傾斜地に校舎があったと推測できる[19]。

なお、冒頭に紹介した岡田健蔵の文章には、元町から谷地頭に移るまでの間「公園の側に一時移転した」ともあるが、その場所などについては、現在のところ手がかりとなる情報を得ていない。

2-3. 私立学校令と北海道旧土人保護法

私立学校令と文部省訓令第12号の影響

1899年、条約改正に伴う外国人の「内地雑居」の施行に対応すべく政府が制定した私立学校令（勅令第395号）は、キリスト

教私立学校に大きな影響を与えた。谷地頭のアイヌ学校もその例外ではなかった。

私立学校令第８条は、「私立学校ニ於テハ公立学校ニ代用スル私立小学校ヲ除ク外学齢児童ニシテ未タ就学ノ義務ヲ了ラサル者ヲ入学セシムルコトヲ得ス」と定めた。私立学校は、公立小学校の代用となり得ると認定されなければ、実質的に学齢期の児童を入学させることができないことになった。文部省は私立学校令と同時に発した訓令第12号において、「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス」との考え方を示し、官公立ばかりでなく「学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校」では「課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」と定めた。私立学校が、公立学校に準じた小学校であろうとすれば、宗教に関する教育や儀式はできない、宗教教育や儀式を行うのであれば、学齢の子どもを教育することができない、ということになったのである。

1900年４月28日付け『函館新聞』が報じた「土人学校の近状」との見出しで、次のように報じている。

> 昨年八月文部省令新に発布されて以来、同校に於ても従来の組織を改め、土人児童学齢以下の者は小学校制度に依りて之を教養させるを得ざるに至りしも〔中略〕新に育児院なる名の下に日用必須の学科を課することし、学齢以上の者に対しては私立学校令に基きて其筋の許可を受けたる私立学校教程を課することいなせりと。

この記事によれば、聖公会は、谷地頭のアイヌ学校の組織を変更し、学齢以下の子どもを対象とする課程を、学校ではない「育児院」とし、学齢より上の年齢の青少年を対象とする課程は私立学校令に基づく学校としたことになる。私立学校令と文部省訓令第12号に対し、同校では宗教教育を実施することを選択し、学齢児童を対象とした課程を“正規”の学校ではないかたちにしたのである。

1900年以降、アイヌ児童の就学率は50％を越え、急速に上昇していく。このような時代の中で、小学校ではない「育児院」に子どもを入学させる者がどれほどいるのか、また、小学校を卒えた後の進学先として、果たしてこの聖公会の学校を選択する者がどれほどいるか、こうした点がこの学校の入学者の確保に大きな意味を持つことになった。

北海道旧土人保護法第９条の影響

私立学校令と同じ1899年、政府は、「北海道旧土人保護法」（法律第27号）を制定する。同法第９条は、アイヌの「部落ヲ為シタル場所」には、「国庫ノ費用ヲ以テ小学校ヲ設クルコトヲ得」と定めた。北海道庁は、1901年から、同法に基づく小学校の設置を開始する。

前述（註13）した伏根の回想から考えれば、同法制定をもって行政の側が十分な予算を確保したとはい言い難く、日露戦争の時期には学校の設置も“停滞”している。それでも、ここに至ってようやく、行政の側が、順次、“官立”学校を設置していったのであり、キリスト教によるアイヌ学校の置かれた状況は、ここでも大きく動くことになった。

2-4. 学校の廃止

私立学校令と北海道旧土人保護法の制定以後、聖公会は、アイヌ教育から手を引くようになる。1890年代に設置したアイヌ学校を、公立に移管された春採の学校を除き、数年の間に全て廃止した。谷地頭のアイヌ学校もその中に含まれている。

谷地頭の学校の廃止時期については、1906年１月１日付け『函館新聞』が、前年の主

な出来事をまとめた記事の中で、６月24日に同校が閉鎖されたと記しているので[20]、このときであると推測できる。ただ、1901年以降ここに至るまでの同校の沿革については、今のところ、［表１］に示す統を除けば直接の資料を得ていないため、ほとんどわからない。

３．学校の実態と周囲の議論

3-1．生徒数など

学校の生徒数などについて筆者が得た限りのものをまとめたのが［表１］である。同じ年度でも資料によって数字が違っていたり、計算が合わなかったりするところもあるので、個々の資料についてはなお検証を要するところが多いことは認めざるを得ないものの、［表１］から、生徒数がおおよそ20名前後、多いときで30名程度であること、生徒のほとんどは男子で、女子は多い時でも４名程度だということなどはうかがえよう。

生徒の出身地は、有珠（現在の伊達市）、室蘭、幌別（登別市）、白老、帯広、白糠、釧路などであり、当時、聖公会が活動していた地域とおおよそ重なる。

［表１］に記した資料からは、なお幾つかの情報が引き出せる。

例えば1895年３月発行の『北海之光』第21号の記事は、同校の生徒に女性が２名おり、そのうち一人は伝道のため釧路に行っている、と記している。同年のネトルシップの報告も「授業の余暇には生徒たちは伝道の援助に出ています」と述べており。同校の生徒の中には伝道に携わる者がいたことがわかる。

河野常吉が筆写した1900年１月１日付けの新聞記事は、生徒数のほか校舎の坪数、敷地の面積なども報じている。以下に引用する。

> 函館土人学校
> 校長は英国人ネトルシップ氏、現在の生徒は予科十一人本科四人、同校には附属育児院あり、土人の十四歳以下の者を入院せしめ、目下十四名の院児を収容せり。一昨年末は生徒員数二十一人にして、現に八人の増加あり。昨年中は入学者七人入院者九人、退学者は四人退院者は一人あり。校舎坪数七十六坪にして敷地総坪数は九百坪あり。運動場四千坪校外三町を隔つるの所に在り、生徒の学業追々進歩し来たる、最も衛生に注意し、別に運動会等の催しなく、毎日フートボールの類を課すと云ふ。

「フートボール」はフットボールのことだろう。4000坪＝12,000㎡の「運動場」は、こうした球技には十分な広さである。

仁多見巌によるバチラーの伝記（『異境の使徒　―英人ジョン・バチラー伝―』北海道新聞社、1991年）の71ページに、同校の写真が載っている。ヤギと思われる動物を生徒が牽き、背後に広大な敷地が広がっている。900坪という「敷地総坪数」と、このような家畜の飼育の実習などを行っていた可能性をうかがわせる。

敷地や運動場の広さや、「毎日フートボールの類を課す」といった記述からは、比較的恵まれた環境だったことを想像させる。しかし先に引いたネトルシップの報告には、「学校の建物が移動したり宣教師の住居に付属していたりした」「土地がわれわれに貸与されるのが廃止されましたので、即刻建物を土地の外へ移転させねばなりませんでした」といったことも書かれており、学校そのものが落ち着かない時期もけっこう多かったことを窺わせる。

3-2　学校行事の記録から

クリスマスの記録を幾つか確認できる。ここでは2つの資料を紹介する。

１つめは、『北海之光』第66号（1899年

1月）掲載の「函館アイヌ学校クリスマス」という記事は、1898年12月27日午後４時から同校の「クリスマス」が開催され、「来賓」や職員生徒ら50余名が参集、年少の生徒は聖書の「暗唱」を、年齢の高い高等科の生徒は「演説」を行ったと記す。さらに「校長アンドリュース教師には、予て用意し置かれたる贈品を、甚だ愉快なる方法を以て校内一般の人々へ贈与せらる。

皆之れを受け愉色面に溢る。来賓の帰へりたる后ち、尚種々の遊戯をなして、時の移るを知らず。時辰既に10時を注意するに至りて各自漸く寝に就きぬ。」と結んでいる。

プレゼントを貰った「校内一般の人々」には、もちろん生徒が含まれるだろう。「甚だ愉快なる方法」の、具体的なところはわからないが、受け取る者にとって楽しい工夫をしたであろうことは推測できる。そして皆が「愉色面に溢れ」、「来賓」たちが帰った後、おそらくは待ちかねたように、生徒たちはいろいろな遊びに興じて、時間の経つのを忘れるほどで、夜の10時を過ぎて、ようやく寝床に就いた。楽しげな様子を彷彿をさせる。

「金岩生」（金岩捨次郎）による「函館アイヌ学校クリスマス報告」（『北海之光』第91号、1901年２月）は、1900年12月のクリスマスの様子を伝える。

このときは12月29日に開催、参集したのは30名ほど。記事にはこのときのプログラムが載っている。以下のとおりである。

一　救之歌　二五番　　会衆一同にて
二　聖書朗読
三　祈祷
四　救之歌　四〇番　　会衆一同にて
五　演説〔生徒による演説〕
六　聖書暗誦〔生徒による暗誦〕
七　演説〔生徒による演説〕
八　問答〔生徒による「問」と「答」の弁論〕
九、十　演説〔生徒による演説〕
十一　新撰賛美歌四十九番　会衆一同にて
十二　主の祈り　会衆一同にて
十三　祝祷

聖書の朗読や祈祷のほか、生徒の「問答」や「演説」が目を引く。記事が伝える演説の内容は、多くは聖書に関する話題であるが、中には、「今やアイヌ人を導く者もアイヌ人でなければならぬと考へます。故に此の導者となる者の出来る様、此目出度日に当り真心を以て神に祈り、又彼等アイヌ人のために計はるゝ恩人方にも謝し、今後尚力を尽されんことを深く希望致します」と、自分たちの決意を述べたものが見られる。

『アイヌ民族写真・絵画集成　第６巻　歴史』（横山孝雄編、萱野茂監修、日本図書センター、1995年）の83ページに、1890年代後半の写真として「日本聖公会函館伝道学校の大沼ピクニック」が載っている。「日本聖公会函館伝道学校」とはアイヌ学校のことを指すと思われるが、写真に写っているのは年長者ばかりなので、学齢以上の課程の生徒たちだけが参加したものだったかもしれない。

生徒は全員が寄宿していた。ただ、寄宿舎について詳しいことは今のところわからない。

長期の休暇になると、生徒たちはそれぞれに帰郷した。先にも引いた1900年４月28日付『函館新聞』記事「土人学校の近状」は、「同校にては来五月一日より六月末日までを夏期休暇の季となし、生徒をして帰郷せしむる由」と記している。休暇の時期が５～６月と「他校と其例を異にする」理由について「農期に際し児童を帰郷せしむ

ることの非常に其父兄を満足せしむるものあるに基くと云ふ」と記している。

3-3. 生徒の他校派遣

中村一枝『永久保秀二郎の研究』(釧路市、1991年)によれば、聖公会が釧路の春採に設置した小学校に着任した教員・永久保秀二郎の日記に、谷地頭のアイヌ学校の生徒が「助手」などの立場でここに派遣されていたことが記録されている。以下、同著が挙げる日記の記述の幾つかを重引する。カッコ内はその記事の日付である。

> 「ペイン女来校。土人児シンヌレッキ伴ヒ来リ。之ヲ以テ生徒ニ羅馬字ヲ教授セシメントス」(1894年9月10日)
> 「当校生徒ヘ羅馬字教授ヲ担任セシ旧土人シヌレッキ本日皈函セントテ辞シ去レリ」(同年12月17日)
> 「ペイン女来校　故事トノレック事有古久松ト云者ヲ連レ来リ羅馬字教授及目暗ヲ伝道セシムト云フ」(1895年1月22日)
> 「トノレッキ即有古久松当校生徒ニ是迄羅馬字授業セシ所其ネトルスップ氏ヨリ皈函ノ電報ニ接シタルニ付皈途ニ上レリ」(同年4月18日)
> 「トノレッキ後任ダビデ即塩田平助来校」(同年4月22日)
> 「羅馬科アンテレ(沢宇吉)函館ヨリ来校教授ス」(同年9月11日)
> 「函館ヨリポンスカ、オコテ来ル」(1896年11月10日)

ここに名前が挙がっている「ペイン」は聖公会のルーシー・ペインで、このとき春採のアイヌ学校で聖書の授業を担当していた。聖公会は、その「助手」として、谷地頭の生徒を派遣していた。上記の日記の記述からすると、おおよそ3ヶ月程度で順に交替させながらの派遣だったようである。前述したクリストファー・フライの論文が述べる、同校“実習”派遣がこれである。ペイン本人はアイヌ語を余り知らず、春採の生徒はローマ字に馴染みがなかったために、「助手」が必要だったという実態もあっただろう。

ペインによる聖公会への報告にも、「ネトルシップ氏は、私の春採アイヌ学校及びその他の仕事を助けるために、彼の少年（生徒）の一人を、三ヶ月間、私に貸してくれた。私は、彼がたいへん役に立つことがわかった。この少年は、私が聖書とローマ字の授業をしているとき、その場にいて、翌朝、再び生徒たちに同じ授業をする。[21]」と記している。

3-4. 生徒の募集と入学者

中村一枝『永久保秀二郎の研究』には、谷地頭の学校の生徒募集や春採の生徒がこれに応じて谷地頭に入学したことについての記録も紹介されている。

> 「函館アイヌ学校ニテ生徒三名募集ニ付勧誘照会及昨九月ヨリ本月迄ノ当校景況ヲ報告セヨトノ事。」(1895年6月28日)
> 「結城正〔庄〕太郎今回函館ネトルスップ方ノ学校ヘ遣ル事ニ其父母岸及サキニ篤ト相談シ彼等大ニ甘諾セリ」(同年7月17日)
> 「ショッコ〔結城正太郎〕明日愈々函館アイヌ学校ヘ往クコトトナリ餞別等ヲ与ヘ且今后一身上ノコト杯深ク訓戒セリ」(同年7月20日)
> 「ショッコ愈本日発帆」(同年7月21日)

募集の告知が6月末に届き、7月半ばには結城庄太郎の両親の「甘諾」をとりつけ、下旬には出発、という、筆者の眼にはいささか慌ただしく感じられる日程で物事が進んでいる。中村一枝によれば、結城庄太郎はこのちょうど一年前、1894年6月に、春採の他の2名の生徒とともに洗礼を受けており、この3名が1891年開校の同校の生徒で最初の受洗者だったという。谷地頭の学校が毎年同じころに生徒の募集をしていた

とすれば、洗礼を受けた頃にもその年度の募集が届いていたであろうから、その時から既に谷地頭への進学の話があったのだろうか。同時に受洗した他の２名が谷地頭に行ったことは確認できないので、やはり釧路から直線距離でも500kmほど離れた函館への進学は、簡単に選択できることではなかっただろう。

それでも、永久保秀二郎の日記から、限られた人数でのことではあるが、キリスト教の小学校から谷地頭の学校へ進学し、そしてキリスト教の伝道と教育の担い手となる、という回路が形成されていたことが窺える。前述したような私立学校令などによる“統制”と、それによる聖公会の“撤退”がなければ、かかる回路がその後も続いていた可能性があることは押さえておきたい。

このほか、谷地頭の学校の生徒募集や生徒の入学に関する記録として、新冠の鹿戸ヨシと帯広の伏根弘三の回想があるが、これらについては後述介する。

3-5. 卒業生

その学校に学んだ者の中から“著名な卒業生”だけを取り上げるのは、決して好ましいことではない。だが、同校に関する資料が乏しい中で、どのような人びとがここで学んだのかということを少しでも具体的に知る手がかりとして、比較的記録が残されている卒業生若干名を紹介する。

金成マツ：1875年幌別村の生まれ。函館のアイヌ学校には、二十歳近くになってから学んだことになるので、助手のような立場でもあったと思われる（後述する知里ナミの回想による）。函館で学び、1898年に日高の平取の教会に伝道者として赴任、1909年からは旭川の教会に赴任する。この旭川で、金成マツは、アイヌ語の研究者として有名な金田一京助に出逢う。後に金成マツは、大学ノートに多くの口承文芸を筆記し、金田一や知里真志保らに送り、それらはアイヌ語・アイヌ口承文芸の貴重な資料となった。このノートのアイヌ語はいずれもローマ字で書かれており、それは、金成マツが谷地頭でローマ字の教育を受けたことによる。

知里ナミ：1879年幌別村の生まれ。金成マツの妹。金成マツとともに谷地頭の学校に学び、マツと共に平取の教会に赴任している。後に登別の知里高吉と結婚、知里高央、知里幸恵、知里真志保の二男一女をもうけた。

谷平助：1877年、有珠村の生まれ。谷地頭の学校を卒業した後、いったん地元に戻り、その後、1912年からバチラーの下で伝道活動に従事、主に幌別で活動した。村上久吉『あいぬ人物伝』（平凡社、1942年）は、幌別にあった鉱山の教会に行って、そこで仏教僧侶の経験を持つ人物にキリスト教の教えを説き洗礼を受けさせた、という逸話を伝えている。

3-6. 知里ナミの回想から

いま挙げた卒業生のち、知里ナミは、1960年頃にＮＨＫ札幌放送局が行った「アイヌ伝統音楽」に関する調査の中で、函館のアイヌ学校についての回想を語っている[22]。これは、音楽についての調査の中で話題がアイヌ語の賛美歌のことになり、その流れで同校に話題が及んだものである。

談話から確認もしくは推察できたことを列記する。体験者ゆえの具体的な記憶が散見できるので、談話の内容を引用するかたちで紹介する。

・知里ナミは「明治25年」に入学し、「足掛け７年」在学した。

・生徒はほとんどが男子で、女子は自分（知里ナミ）を含め４名。なお姉の金成マツについては、知里ナミによれば、生徒では

なく「オルガン鳴らしたりミシンやったり」していた、ということなので、助手もしくはそれに近い立場で在学していたと思われる。

・学科の授業のほか、男子は「鍬持って、土たがやして」いた、女子は「いろいろな掃除の方やらね。それから畑の草取り」といったことがあった、ということなので、農業の実習のようなことが行われていたと思われ、前述した『異境の使途』が掲載する写真の風景と合致する。

・授業で使った本として名前が挙がったのは「シンタイトクホン」で、これは『新体読本』という当時の習字の教科書だと推察する。

・アイヌ語の賛美歌や歌については、特に学校で学ぶというよりも「遊ぶ時にやってた」ということで、談話の中で挙げられた例は、「円く輪を作ってね、手握ってね、こういうふうに、回りながら、そして、すぐ座らないとね、負けるんですよ。」という、今でいう椅子取りゲームのようなものを行うときに「タダントシリ　ピリカ　ピリカ　ピリカ　イナンクル　ピリカ　ヌンケンクスネ　ワン・ツー・スリー！」と歌ったという。寄宿して生活する中でさまざまな機会に耳にし、また歌っていた、ということではないだろうか。

3-7. 学校への参観者とその記録

函館に限らず、アイヌ学校には、「視察」「見学」というかたちで多くの参観者が訪れている。特に、後年、鉄道などの交通手段が整備されると、白老、帯広、旭川などの、観光地として有名になった地域や、都市の近郊にあった学校には、大勢の参観者があり、授業にも支障をきたしたことが教員らにより記録されている[23]。

函館のアイヌ学校について、教員だった金岩捨次郎による次のような記録がある。当時の参観者の態度などがうかがえるので、少し長くなるが引用する。

〔1899 年〕五月中旬以降函館アイヌ学校を訪はれたる人数は凡百名もありき、而して其多分は青森に開かれたる教育大会に臨まれたる小学校教員諸子なり。其他文部省学事視察官あり、地方部視学官あり、郡部視学官あり、師範学校教員あり生徒あり村長あり平人あり、〔中略〕アイヌ人が我が国教育者の注意に登る発途点と思へば誠に喜ぶべき事なり。
而して余は右来訪者には生徒の図画又は試験答案の内希望に随ひ一二葉づゝ呈せり。教育上に関しての問は何れも大同小異なりき。然れども一般に本校教育の基礎なる宗教的感化の事には興味を以て迎へられざるものゝ如く見受けたり。此多数の来訪者の中四五名は当アイヌ学校を観んため態々青森より渡函せりと自白せられあるもあきり。而して此等来客に対し余が応答の末大抵は、「嘸ぞ困難でショー」との挨拶なりしが、中には生徒奨励の途を得たりとて本校に尊敬の意を表して辞し帰れるもあり、或はアイヌの子弟を憐憫に思はれたるもあり、或は生徒の書画を見て賞賛の辞を惜まれざりし人々もありし。中に唯一客との種々なる問答の末終に感化上の事に及べり。余は、本校はキリスト教の感化を主とし、其外必要の学科を教授すと且つ告げて曰く、宗教的感化を後にし、他学科を先務とするときは経験上其成功覚束なしと。客曰く、嘸ぞ困難ならん。然れども困難の中一種不可言の快楽あるべしと。此の語余が心情に触接せるものにして〔後略〕わが生徒よアイヌの子弟よキリスト教感化の基礎の上に諸学術を成就し教育社会の注意の的となれよかし[24]。

この記録を掲載した雑誌は６月の発行なので、５月の「中旬以降」で「凡百名」が来訪したというのは、相当な人数である。金岩によれば、その多くは青森市で開催された会議に参加した教員とのことであり、

その中には他の学校や函館の街そのものが「視察」の主たる目的ではあったろうが、「当アイヌ学校を見んため」の者も４、５名いたとも記しており、総じて来訪者の“関心”の高さを窺うことはできる。

金岩の述べるところによれば、参観者の多くは同校の「基礎」である「宗教的感化」には「興味」を示さない。「教育上に関しての問は何れも大同小異」とするその「大同小異」の中身について、その文章は特に触れていないものの、「応答の末大抵は、「嘸ぞ困難でショー」との挨拶なり」との記述から推測すれば、もっぱらアイヌ児童というシャモ（和人）にとっての「異」民族の教育、とりわけその「困難」さを前提とした質疑に終始したものが多かったことを推測させる。「キリスト教感化の基礎の上に諸学術を成就し教育社会の注意の的となれよかし」との結びの言は、「キリスト教の感化」をこそ「先務」としその上で「必要の学科」を教授することが大事だと述べる金岩の認識を反映したものだと先ず読むべきだろうが、「視察」者の多くが同校と生徒たちに対して示していたであろう態度に再三接したがゆえに、「諸学術」の「成就」によってこそ「注目の的」とすべきとの意識も、或いは含まれているのかもしれない。

なおこのほか、筆者が看過できなかったのは、来訪者の「希望」に応じ、生徒の「図画」や「試験答案」を「呈し」たとの記述である。これらを所望した来訪者たちに、来訪の「記念品」を、といった意識はなかったろうか。それに応じて「一二葉づヽ」渡したとする教員にも、それを咎める意識は希薄だったと見るべきではないだろうか。

４．周囲の議論―キリスト教伝道者による教育活動に対する焦燥と警戒

既に少し触れたとおり、このように展開していたキリスト教の伝道者によるアイヌ教育活動に対して、教育行政の関係者を中心に、相当な焦りや警戒心を示す議論が少なくない。

早い例では、1881年の『北海道学事新報』に、「其教法ノ如何ハ兎モアレ外国伝教師カ其布教ニ勉強シ智愚ヲ問ハズ何人ニモアレ同等ニ其教法ニ誘導セントスルノ親切ハ誠ニ驚クベク」「而シテ僕ハ当道教育者ノ此ノ如キ親切心ニ乏ク土人ヲ見ル猶ホ往時ニ異ナラザルヲ痛嘆セズンバアラズ」[25] と述べている。直接にキリスト教のアイヌ教育に言及しているわけではないが、「外国伝教師」の「誘導セントスルノ親切」と対比して「当道教育者」によるアイヌ教育を「痛嘆」している。

1883年２月、函館、札幌、根室の三県が宮内省にアイヌ教育のための「資金」を申請したが、その申請文の中で三県の県令は、アイヌ教育に対する国の「資金」を要する理由として「今日ノ勢外国伝教師等年々巡回誘導候ニ付実ニ忽ニスベカラサルノ時会ニ立至リ居リ候」[26] との認識を示している。

1890年代に入ると、かかる論調がさらに増える。

例えば1893年、北海道教育会が設けた「旧土人教育取調委員」の報告は、「あいぬノ学校未ダ起ラス徒ラニ外人ヲシテ之ニ着手セシム幌別ノ学校ハばつちら一ノ管理スル所ナリ二十余人ノあいぬハ其頭使ニ応ゼリ春鳥〔ママ〕ノ校舎ハぺいんノ建ツル所ナリ四十余人ノ頑児ハ其化育ヲ受ク」とキリスト教アイヌ教育の活動について具体的な校名を挙げて述べ、「之レヲ傍観シテ知ラズト為スハ国家ノ恥辱ニアラズヤ」と主張した[27]。

同会の機関誌は「アイヌ教育の事たる、邦人の冷淡なるより、其教育の大半は、外人の宗教家に委したるが如し」とし「今其

学校〔キリスト教によるアイヌ学校〕に臨みて親しく見分するに、未だ聖影を奉戴せず、随ふて御誕辰の佳節を祝するが如きことなし。甚だしきは生徒中　天皇陛下を知ざらるものあり、豈慨歎に堪ふべけんや」[28]と述べる論説も掲載している。キリスト教の学校に対して「聖影」の「奉戴」や「御誕辰」の祝賀、すなわち天皇制に関わる学校儀式の有無を問題にし、生徒の中には「天皇陛下」を知らない者すらいる、といった点が「慨歎に堪」えない、と述べている点が重要である。

1900年にも、「耶蘇教の諸派殊に聖公会かアイヌに対して尽さるゝ処よく他宗を圧して独占の有様なり」と聖公会のアイヌに対する布教ぶりに言及した論説が載っている。そこでは、「沙流地方は殊に信者多く、平取村は其本部にしてオホコツナイに伝道師の常任するあり、幌去には夜学を開きて羅馬字と賛美歌とを教ふるアイヌ人イラムカシなるものあり、ヌキベツには同宗の保護を受けてアイヌが其土人を教授し居れり」と平取における布教の活発さに触れ、「某学校の生徒村社の祭礼に列す、中に某教信者の子弟あり。牧師某見て以て大に怒り、列中より数名を排して連れ去る。苟も学校の儀式として参列せる場より無断に其生徒を連れ去る」との逸話を紹介し、「牧師」の「頑愚不法の処置」と「学校儀式を侵害せらるゝ教員其者」の「迂闊」を強く批判している[29]。

先に述べた「私立学校令」及び文部省訓令第12号による規制については既に述べたが、その背景にはこうした関係者の危機感があった[30]。

5．アイヌの受け止め方

では、アイヌの側では、このキリスト教の学校はどのように受け止められていたのか。十分な資料を確認できていないため、どちらかと言えば積極的に受けとめた事例に限定した紹介になるが、以下に３人の例を取り上げる。

一つめは、新冠の鹿戸ヨシの回想である。姉が、実際に谷地頭の学校に通っている。鹿戸ヨシの回想談の一部を紹介する。

〔前略〕函館さ子供等を連れてって、裁縫も教えるし勉強も教えるって役場でまわって、この子供やっておいて覚えらせたほうがいいって言うので、わしが行くことに父親は決めたんだ。そして、迎いに来たっていうもんだから、母親、わしの手ひかえて木原さ行ったり、山の中に行ったりして、二晩も泊まりながら引っぱって歩いて隠したんだ。〔中略〕行くことに父親は決めたもんだから、いないって言うわけにいかないから、わしの代わりにわしの姉をやったんだ。そして姉は勉強して、人の手紙でもどんどん書いたり読んだりできるのに〔中略〕婆達は、「女なんて字を覚えなくてもいいんだ。男さえわかればいいんだ」って〔私＝鹿戸ヨシを〕学校さ行かせないんだ。弟は学校行ってたから、弟本読んでいればそばに行って、弟が「あ」だとか、「い」だとか言えば、それを見て、「あ」とか「い」とか言って真似して、仮名ぐらいは覚えたんだ。

それから、わしなんぼかアメリカ学校行ったんだ。その学校は、新冠に別にあったわけでもないんだけど、どっからか、バチェラーさんと二、三人来て教えるんだ。弟は日本学校なんだ。日本学校は本も自分で買う。半紙も墨も学校で使うものはみんな自分で買うべさ。安いんだけどね。アメリカ学校ではそのとき流行っている短靴とか靴下くれるんだ。それから、本もみんな銭こかかるものがかからないんだ。〔中略〕

そのアメリカ学校は、字はわからんべさ。だからただ見ていて、なんだか知らんけど書いてあってそれ読むんだ。「ア・ベ・セ・デ・エ

> ・オ・エム・エン…」って〔中略〕日曜になればイェスカニ歌うんだ。〔中略〕そのアメリカ学校で教えてくれたことだって、大分覚えてあったけど、なんも使い方ないもんだと思って、一つも思い出さなくなったら、忘れてしまった〔後略〕[31]

「役場でまわって」とあるので、函館のアイヌ学校の生徒の募集に、役場の職員が関わっていた場合があったのかもしれない。

この回想を読む限りでは、鹿戸ヨシの母は、幼い娘を遠いところにやるのは嫌だと言い、子どもを連れて山の中などに逃げた、とある。一方で、父は学校に行かせようとしていた。このときは「代わりに」姉が函館に行ったが、弟も公立の学校に通い、また鹿戸ヨシも、本人の弁によれば「なんぼか」という程度だったとはいえ、新冠にできたキリスト教の学校に通っている。このことからすれば、母も、遠い函館への就学であるといった点について拒んだのであって、子どもを学校へ通わせることそのものには否定的ではなかった可能性がある。

鹿戸ヨシは、キリスト教の学校を「アメリカ学校」、公立の学校を「日本学校」と呼んでいる。おそらく当時この地域のアイヌがそう呼び慣らしていたのだろう。
鹿戸の回想は、「日本学校」は学用品などの経費は生徒の家庭が負担しなければならないが、「アメリカ学校」はノートなども支給だったことを窺わせる。ローマ字を教わったことも窺える。「日曜になれば」歌ったという「イエスカニ」という歌は、おそらくアイヌ語による賛美歌である。

またこの回想によれば、弟は「日本学校」に通っている。鹿戸ヨシが、自分と弟とを引き比べている回想は、先ずは男子だけは一定の経費を負担してでも日本語の読み書きを学ぶところに通わせた、というところに、親たちの状況認識と判断があったことを示唆している。

二つめは、先に少し紹介した、帯広の伏根弘三である。

伏根は、生涯を通じてアイヌの社会的地位の向上などに関わる様々な活動に従事したことで知られる。1897年ごろ、東京に赴き、内務省などにアイヌの生活向上を訴えたことがある。おそらくこのときと思われるが、東京に行ったとき列車に乗り合わせた男性（伏根によれば、後に男爵・前田正名だったとわかったという）から、函館にアイヌの学校があるので一度行って見てみるように言われ、東京からの帰路、函館で下車し谷地頭を訪れた。以下は伏根の回想の一部である。

> 谷地頭にあった学校へ行って見ると、五六十人の同族が集って、それはそれはいい声で字を書いたものを前にして歌って居ます。
> 〔中略〕
> その内にどうして教へるのか等と色々聞いて見ました所、無料でアイヌの勉強したい者を集めて学問させて居るので、若し入りたいものがあるならば旅費までもやると言ふ話
> 〔中略〕
> 伏古に帰ってから、私は二人の青年をその学校に入れることにしました。
> 〔中略〕
> 私は教育が愈々大切なことを知って、是非学校を立てたいと思って支庁へ行った[32]。

伏根の語るところでは、谷地頭の学校を参観してここに地元からも子どもを学ばせたい、さらには、自分のところにも学校を作りたいと考えたのである。勿論、自ら内務省にまで出かけるほどの行動をとったという伏根の経験を想像すれば、日本の社会の中で生きていくための読み書きの

必要については、より早くから認識していたろう。だが、回想談そのものはやや大袈裟かもしれないが、実際にアイヌ学校を参観したことが、こと伏根にとっては、将来へ向けた具体的な取り組みの示唆を受けたことになったのだろう。

なお、先に述べたとおり伏根は、1901年に自力で学校を設け、浄土真宗の僧侶山縣良温を教員として招いた。山縣は翌年、同じ十勝の本別に転じるが、その後任の教員には、地元出身の函館のアイヌ学校の卒業生井深市太郎を招いたという[33]。ここでも、谷地頭のアイヌ学校が、他の聖公会の学校や教会へ卒業生を派遣する、という役割を、結果として一時的なものだったとは言え、果たしていたことが窺える。

三つめは、有珠に生まれ育ち、のちバチラーの養女となったバチラー八重子の回想である。以下にその一部を引用する。

> 今から考へますれば夢のやうでもありますが函館にゐる西洋人が耶蘇学校を開いて　ウタリの子弟を方々から集めて教育してゐると云ふ事が　小さい私の耳に入りました時　私の小さい、、、心はどの様に其の学校をあこがれたかわかりません。私の村からも谷平助様　菊田スマ太郎様　志茂タケ子様などが　その学校のお世話になり　いろ、いの事を教はりました。其中にも横文字などすら、、読まれるのを見聞きしましたので　本当に尊敬の念にかられたものでした。こうした皆様が学校休みに帰られてのお話を小さい耳にはさんでは感心致しました。いうことです。

バチラー八重子自身は谷地頭の学校には入学していないが、「小さい」頃に谷地頭の学校の話が「耳に入」っていたこと、地元からここに通った者たちが休暇で帰郷したとき直接間接にいろいろな見聞をしたことがわかる。付け加えると、キリスト教の教育事業については、事業者である教会や伝道者による記録が比較的多く残されるため、それらに依拠して“キリスト者が恵まれない立場の人びとに手をさしのべる”という構図が描かれる傾向が、これまで多かったように思う。だが、鹿戸やその親たち、伏根らの例を見れば、当然のことながら、アイヌ自身は、ただに手をさしのべられる側だったのではなく、厳しい社会状況の下に置かれてはいたが、だからこそ自分たちの将来を見据えた判断と行動をしていたことがうかがえる。

６．いくつかの逸話

これまでに述べた他、筆者が確認できた限りでの同校に関する記録や回想の幾つかを紹介する。

一つは、函館市長などをつとめた斎藤興一郎の回想である。彼は幾つかの回想談の中で谷地頭の学校とその教員、生徒たちに触れている。

> 〔前略〕ネトルシップのアイヌ学校は碧血碑の下の横山さんの家のあたりにあり生徒は18人位居りました。ネトルシップと生徒のアイヌ達は良く下のグランドでホッケーをやって居りましたが、ホッケーと云うものは此の時初めてみたものです。（最初はホッケーと云うのがわかりませんで、アイヌベース・アイヌベースと呼んでいました）〔後略〕[34]

> 〔前略〕いまの市営温泉の前が空地で、そこでアイヌ学校の生徒たちのやるホッケーとかハンドボールとかいうようなことを、われわれそのとき非常に珍しくみておったんであります。
> 〔中略〕
> ネトルシップが派手なきれいな赤い自転車

に乗ってあるくのが、どうにもうらやましくて仕方がないので、私もクリーブランドという自転車を44円出して買って乗り回したもんであります〔後略〕[35]

「アイヌベース」という呼び方は、齋藤が「此の時初めて」と述べているとおり、当時の函館の住民はアイヌ学校の生徒や教職員たちが興じるさまを見て、はじめてこの球技を知ったことの証左だろう。なお、同校でのホッケーについては、『月刊ホッケー』第21号に「アイヌ学校とホッケー」という記事があり、おそらくはゲームの記念撮影だろうと思われる写真を掲載している。[36]

寺田健三による、次のような回想もある。

主に対抗試合迄に進んだのは今のア式蹴球です。アイヌ学校ではアイヌ人が相方に別れて対抗試合など遣って居りました。……〔「吾々」＝当時の中学生との試合では〕ハウル商会のドラマンド氏などがアイヌ人側に加ってやったが、吾々の方は優秀なものでありました[37]。

ア式蹴球はサッカーのことである。函館の他の中等学校（この時期であれば、中学校と商業学校がある）の生徒と、函館のアイヌ学校、教会そしておそらくは関係者とが球技に興じる。それは、先ほどみた学校への「参観者」とはまた違った、地域の暮らしの一コマだったと言うべきだろう。

7．むすび——函館と近代アイヌ教育史

以上、駆け足で函館のアイヌ学校の歴史を跡づけてみた。沿革も学校の実態についても、依然として概観かつ断片的なものにとどまることは認めざるを得ず、この点、他日（なるべく早い他日）に、なお未調査の部分が多く残る聖公会の記録資料を補う作業を自らに課しておきたい。

それでも、本稿を通して筆者が感じたことを２つ提示して、まとめに代えたい。

一つは、この函館のアイヌ学校が果たした役割に関することである。同校が存続したのは15年間程度であり、決して長いとは言えない。しかしながら、家から遠く離れた函館に子どもを出すという家族の決断には、そこに子どもを学ばせることに対する期待あるいは信頼があったと見るべきだろう。そして実際、ごく限られた期間ではあったが、同校の生徒・卒業生が各地の学校・教会に派遣される、という流れが存在していた。それだけに、私立学校令などの規制とあいまって、この回路が成立しにくくなったことは、アイヌにとって、子どもの就学・教育にかかわって同校を選択する意味や可能性が急速に減退したことを想像させる。函館のアイヌ学校の歴史は、アイヌと教育との関わりにおける、こうした構図を示唆するものだと筆者は感じている。

もう一つは、最初に紹介した岡田健蔵の文章でも触れている、明治以後の函館とアイヌ民族、とりわけ、函館市民の圧倒的多数を占めるシャモ（和人）にとってのアイヌ民族に対する認識に関することである。

たしかに、明治の初年から、函館の市街や近郊のアイヌの人口は、統計上は零である。この点、函館では、シャモ（和人）は、北海道の他の地域に比べて、アイヌ民族のことを身近に感じることはない、という指摘は、確かにその通りだろう。そして「でも、この函館にもアイヌの学校があって、市民との“ふれ合い”もあった」という、“今まであまり知られていなかった歴史”を提示することで、“近代の函館にもアイヌの人びとの歴史があった”ということを知ることにも、確かに意味のあることだと思

う。だが筆者は、同校に関するいろいろな記録を見て、また、近代の函館とアイヌの歴史に関わる資料の幾つかを見る中で、ここで自足してしまうことへの懸念も覚えるようになった。

このような議論で言われる「アイヌの人びと」なるものは、「アイヌの子どもだけを集めた学校」というような、外形的な括りのところで「アイヌ」であることがわかりやすくなっていることを前提にしていないだろうか。民族衣装を着用している、伝統文化を実践・継承している、といった枠に当てはまる人びとを、無意識のうちに前提として、その枠にあてはまる人びとを「アイヌの人びと」とし、それと“出会う”“共に生きる”ということを話題にしている、ということではないのか。それは、この函館のアイヌ学校について、アイヌの学校だという情報がその当時でも知られていたからこそ、参観者がやってきていたことと、実はあまり隔たりはないのではないか。

けれども、今回、本稿を通して筆者が見てきた函館のアイヌ学校に関わる写真、例えばホッケーの試合の写真などは、当たり前のことだが、生徒たちは民族衣装を着ているわけではない、当時の子どもにありきたりの格好をしている。そして想像すれば、生徒たちは、ふだんは寄宿舎と学校で暮らしているけれど、お使いやなにかで街を歩いたろう。例えば註19の記事は、そのような、日常に街を出歩く場面を伝えるものでもあると筆者は思う。そのとき、すれ違うシャモたちは、先に述べた枠でアイヌを意識している場合、アイヌの生徒たちとすれ違っているとは意識しないだろう。特別な「参観」の対象としてだけではない、ふつうの付き合い、行き交いがある、という、こう書いてしまえば当たり前のことが、ことアイヌの文化や歴史になると、抜け落ちてしまい、或る枠を前提にその存在の“有無”を見てしまっていることは、ないだろうか。――これが、本稿に取り組みながら、筆者があらためて得たことの一つである。

（北海道立アイヌ民族文化研究センター
研究主幹）

---

1) 岡田健蔵「日本最初のアイヌ学校と其校長」『函館』第３年第11号（通巻第24号）、1929年11月。のち岡田健蔵『函館百珍ト函館史実』1956年に収録。

2) 北海道内に設置された、アイヌ児童を対象とした最初の学校は開拓使が1877年に設置した対雁の教育所である。アイヌ児童の官公立学校もしくは私立の教育施設への就学は、筆者の知り得た限りでも、さらに早い時期から確認できる。また、聖公会のアイヌ学校に限ってみても、函館より前に幌別（現登別市内）に設置されている。

3) この学校の名称については、資料により記載が異なっており、今のところ筆者は特定の呼称に絞り込むことができていない。岡田の文にもある通り、この学校は1892年に函館の元町に設置され、翌93年に谷地頭に移転した。ただ、谷地頭にあった時期のほうが圧倒的に長く、元町での設置は校地・校舎を確保するまでの暫定的なものだったと推測できることから、本稿では、暫定的な呼称として、「谷地頭にあったアイヌ学校」と述べる次第である。

4) 『函館市史　通説編第２巻』、1990年。この本文は、函館市中央図書館ウエブサイトで読むことができる。

5) 岡田の文章でいう「我が函館には殆んど没交渉の感があり今日の函館人には夢の様にも思はれるであらう」を意識したと思われる記述が、「函館市史」にも見られる（バチラーが「函館では一年中アイヌを見ることがありません」と述べたことを引用している部分）ことについては、同書もこの点への着目が重要であると留意しているものと受けとめておきたい。

6) 聖公会の他には、1890年代の胆振・日高におけるカトリックのパリ外国宣教会による活動や、やや時代は降るが救世軍やホーリネス教会の例などを挙げることができる（これらについては、福島恒雄『北海道キリスト教史』日本キリスト教団出版局、1982年や仁多見巌『北海道とカトリック』同出版委員会、1983年などを参照した）。また北千島アイヌに対するロシア正教の活動の例もある。ただし、これらキリスト教派の活動についてのこれまでの歴史叙述は、もっぱら教会や伝道者によ

る記録に基づいており、この点、活動の実態、とりわけアイヌの受け止め方や対応の実相については今後の課題が多い。

7)春採については、中村一枝による『永久保秀二郎の研究』釧路市、1991年をはじめとする一連の論考があるが、それらを除けば、キリスト教史や自治体史の中で概説的に言及されるにとどまる。

8) 小川『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会、1997年では、1890年代における「アイヌ教育への関心の高まり」を述べる中で「「官製」アイヌ教育の「不振」」と対置するかたちで「キリスト教伝道者によるアイヌ教育活動」を概観したに過ぎない。他の論者の既往の近代アイヌ史叙述におけるキリスト教アイヌ教育の取り上げかたも、おおむねこのような枠組みである。

9) 近代北海道のアイヌ教育の歴史については、差し当たり前掲小川『近代アイヌ教育制度史研究』を参照。

10) 北海道庁は1886年から殖民地撰定事業を開始、同年制定の「北海道土地払下規則」などの制度のもと、多くの移住民の流入をみた。とりわけ、それまでは移住民が少なかった北海道の東部・北部や内陸部では、1890年前後から移住民の人口が急増、これらの地域でもアイヌが圧倒的な少数者になっていく。前掲小川『近代アイヌ教育制度史研究』99～105ページ参照。

11) このことについては、小川「遊楽部学校の歴史」『日本の教育史学』第51集、2007年を参照。

12)同前。

13)本文に挙げた状況に加え、やや時代は降ると思われるが、1900年頃に伏根安太郎(のち弘三と改名)が経験したという事例が示唆的である。伏根は、後述のとおり他ならぬこの谷地頭の学校を見て、自分の住む帯広にも「是非学校を立てたい」と考え「支庁」に交渉する。しかし「「考へては居るがそう言ふお金はない」と言ふ返事」に終始したという(高倉新一郎「伏古村の旧土人ホテネ君談話聞書」『北海道社会事業』第51号、1936年７月)。伏根は別の回想でも、「以前より〔学校の設置を〕役場や支庁等に謀りしに、内地人の学校経済すら不十分の折柄とて遂にこの希望を達することを得ず」と述べている(「アイノ土人の気焔」『大阪朝日新聞』1903年３月６日付５面)。僅かな回想からの推察ではあるが、当局者が答えたという「考へては居る」との言からは、アイヌに対する学校教育の"必要"を認識はしていることがうかがえる。しかし「内地人の学校経済すら不十分の折柄」との言には、「内地人の学校」を優先する当局者の認識も露呈している。伏根は結局、1901年に、自ら教員を探し(東本願寺の僧侶山縣良温がこのとき教員をつとめた)、帯広の自宅にアイヌの児童を住まわせるかたちで私塾的な教育を開始している。このことについては他日機会を改めて経緯を追跡しその意味を検討したい。

14) 学校の設置年は各市町村の自治体史によった。

15)『新冠町史』新冠町、1966年、745ページによる。

16) バチラーは、自ら辞典を編さんするほどにアイヌ語を学んでいたとはいえ、他の宣教者、とりわけシャモ(和人)がそのようにした形跡は、春採の教員をつとめた永久保秀二郎がアイヌ語に関心を持っていたことがうかがえる程度に過ぎない。さらには、そのバチラーのアイヌ語についても、果たして実際にアイヌに通じたのか、という問題も残る。

17)『北海道教育雑誌』第47号、1896年９月。

18)『函館新聞』1891年９月20日付け。

19)『函館新聞』1925年10月27日付け。谷地頭での火災を報じる記事の中で、焼けた家屋の場所をこのように記しているものである。この記事ならびに住所の特定については、奥野進氏(元函館市中央図書館、現市立函館博物館)から教示を受けた。深く感謝する。

このほか、1902年12月26日付け『函館公論』には、「谷地頭町六十四番地アイヌ学校雇アイヌ」が「青柳町で街路を馬に乗りて疾駆したる廉」について記事にしている。かたちとしては犯罪に関する記事になるので、資料としての取り扱いは慎重にすべきではあるが、ここからは、学校の建物もしくは寄宿舎のようなものが、この住所にあったことを想像させる。64番地は函館公園と八幡宮や陸軍省用地の間にある区画で、43番地からはそう遠くないところである。

20) このことについては『函館市史』年表編から教示を受けた。

21) 英文は次のとおり。ここでは『永久保秀二郎の研究』における中村氏の訳によった。

Mr.Nettleship lends me one of his boys three months at a time, to help in my Ainu school in Harutori, and other work. I find them very useful. The lad is present when I give my Scripture and Romaji lessons, and then the next morning goes over the same sbjects with the pupils again.

22) これらの録音テープは、ＮＨＫ札幌放送局が整理し、現在は公益社団法人北海道アイヌ協会と、調査・録音が行われた各地域の同協会支部において保管されている。所定の手続きにより試聴することができる。以下の本稿での記述は、筆者が2009年11月の「函館学」講座のさい、特に同協会の許可を得て録音を使用したときの記録に基づいている。

23) 前掲小川『近代アイヌ教育制度史研究』224ページ以下を参照。なお、学校ばかりでなく、その近隣に暮らすアイヌの家庭や地域社会にも大きな影響が及んだことも付記しておきたい。

24)金岩捨次郎「見聞諸感」『北海之光』第71号、1899年６月。

25) 岡野敬胤「土人教育」『北海道学事新報』第５号、1881年11月。

26)『公文類聚』第７編第54巻。

27)岩谷英太郎・永田方正「あいぬ教育ノ方法」『北海道教育雑誌』第９号、1893年７月。

28)渡辺嘉重「アイヌの調査」『北海道教育雑誌』第47号、1896年９月。

29）含翠迂夫（元室蘭尋常小学校教員・泉致廣の筆名）「愛乃雑話」『北海道教育雑誌』第84号、1900年1月。
30）上記の泉の文章が「今は私立学校令もできたれば、余が杞憂は不必要となれる」と述べているのは示唆的である。
31）『エカシとフチ』札幌テレビ放送、1983年。
32）高倉新一郎「伏古村の旧土人ホテネ君談話聞書」『北海道社会事業』第51号、1936年7月。引用部分の前後も、この記録と、吉田巌「ホテネ物語」『愛郷草子』（帯広市教育委員会、1958年）によった。
33）『釧路新聞』1901年8月2日付。
34）『函館郷土史研究会　函館植物研究会講演集』1956年
35）斉藤奥一郎『非魚放談』1957年。
36）この資料については、函館市中央図書館の蔵書検索システムの検索により教示を受けた。この他にも、同館による様々な情報検索手段の整備と、その土台をなす幅広い郷土資料の収集によって知り得た資料がたいへん多かった。記して深く感謝する。
37）『函館新聞』1929年6月15日付（この号はスポーツ特集号だった）。この記事については、元木省吾『函館昭和史　郷土新聞資料集　二』（1974年）より教示を受けた。
38）引用中にある「ハウル商会」については『函館市史　通説編第3巻』に「函館の外国人商社は数える〔ほど〕しかないが、その中で明治元年から大正末期まで堅実に営業を続けてきたのがハウル商会である」との記述があり、この他にも市史の中に同社に関する記録を幾つか確認できる。おそらく、会社と教会が、取引き上の関係や社員に信者がいる等の関係を持っていたのではないか。
同社についても、市立図書館が開設している「デジタル函館市史」の検索から多くの教示を受けた。

［表1］　谷地頭アイヌ学校の生徒数などの記録

年	生徒数	教員など	備考	出典
1895	寄宿生徒　20		生徒のうち女性 2	『北海之光』第21号 （1895年3月発行）
	1月1日現在　在学生18 （少年16、少女2） 7月頃　生徒数21 （少年19、少女2）		生徒の年齢 最年長25歳 最年少4歳 洗礼を受けている者　14名	仁多見巌訳編『ジョン・バチェラーの手紙』（山本書店、1965年）（同書収録のネトルシップからイギリスのCMS伝道教会本部宛て報告書。1895年7月31日付け）
1898	生徒数　18			『函館市史　統計史料編』
	生徒数　21			北海道立図書館所蔵河野常吉資料『函館資料　三』（1900年1月1日付け新聞記事「明治三二年函館教育界の大勢」の筆写。ただし新聞名は今のところ不明。）
1899	生徒数　15 （本科4　予科11） 附属育児院　14		「昨年中」の入学7、入院9 退学4、退院1	
1900	学齢次の者　16 、7名 育児院　6			『函館毎日新聞』1900年4月28日付け
1901	生徒数　20 修業　3年	教員　2		『函館市史　統計史料編』
1902	生徒数　20 本科　修業2年 予科　修業3年	教員　3		『函館市史　統計史料編』
1903	生徒数　20 本科　修業2年 予科　修業3年	教員　3		『函館市史　統計史料編』
	生徒数　20　（男子20） 本科　修業3年 予科　修業2年	教員　3 （内国人2　外国人1） 学級数　5	卒業生 累計　5 年度経費 3,000円	『函館教育協会雑誌』 第158号 （1903年8月発行）
1904	生徒数　19　（男子19） 本科　修業3年 予科　修業2年	教員　3 （内国人2　外国人1） 学級数　5	卒業生 累計　8 年度経費 2,800円	『函館教育協会雑誌』 第165号 （1904年10月発行）

［出典及び注］
「出典」欄の統計や新聞・雑誌記事などをもとに作成。（『函館市史　統計史料編』の出典は当該年次の函館区の統計書類）。
年次については、資料に明記されているものもあるが、資料中の「昨年」「一昨年」などの言葉から推測したものもある。

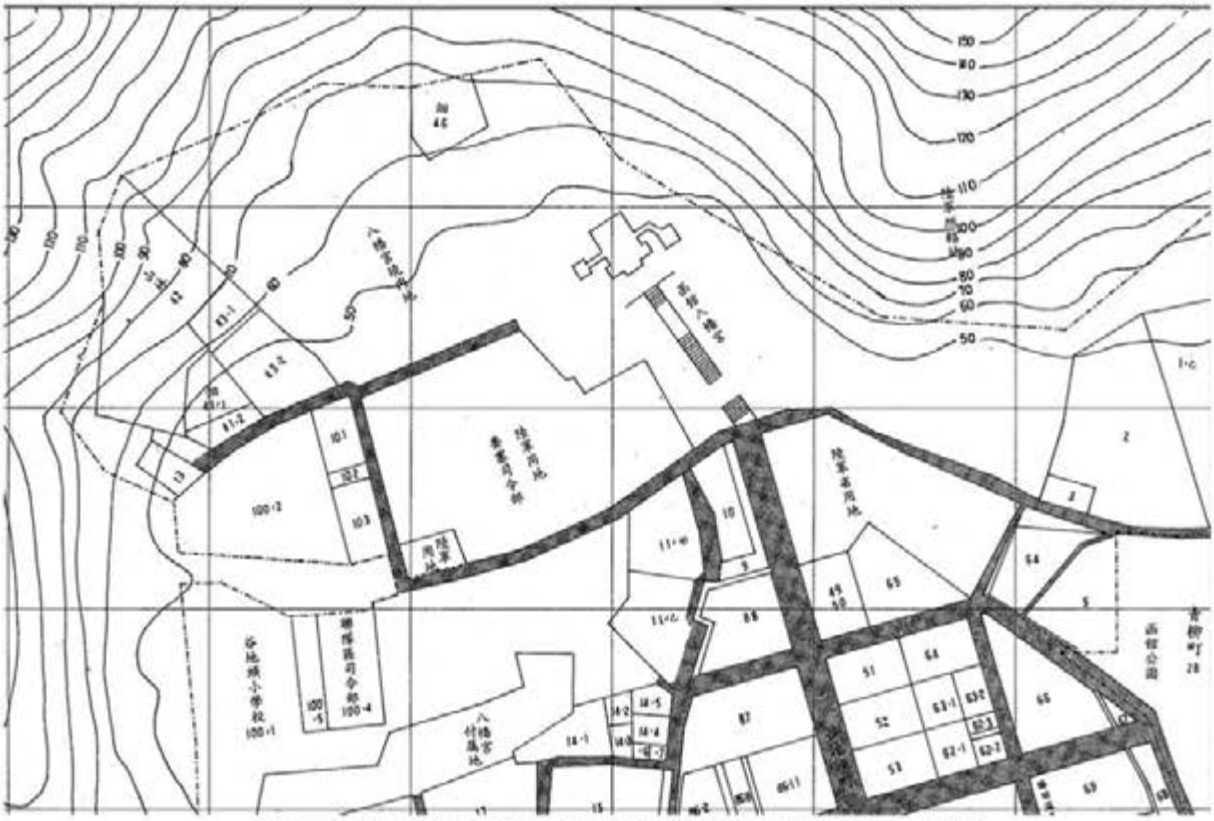
［表2］　函館アイヌ学校関係年表

明治の初年（1870年頃）から谷地頭のアイヌ学校が廃止される1910年頃までの近代アイヌ教育史上の主な出来事を中心に、函館のアイヌ学校、ジョン・バチラーや聖公会の動き、谷地頭に比較的近い渡島地方の公立アイヌ学校である遊楽部学校の沿革などを年表にまとめた。

西暦	明治	こ　と　が　ら
1869	2	・政府が開拓使を設置、「蝦夷地」を「北海道」と改称。
1872	5	・開拓使が東京の開拓使仮学校附属土人教育所に札幌近傍や小樽などのアイヌの青年男女を強制的に就学させる。
1876	9	・明治天皇が函館に「行幸」（奥羽「巡幸」の帰途に立ち寄る）。
1877	10	・樺太アイヌの強制移住地・対雁（現石狩支庁管内江別市内）にアイヌ児童を対象とした「教育所」設置（翌年「対雁学校」と改称）。（最初のアイヌ学校） ・ジョン・バチラー、香港から函館に移り住む。
1879	12	・ジョン・バチラー、平取を初めて訪問する。
1880	13	・平取に公立学校設置。
1882	15	・政府が開拓使を廃止、北海道に函館・札幌・根室の三県を置く。
		・函館県がアイヌ教育の「実地調査」のため学務課御用係永田方正を長万部・遊楽部に派遣。この年、遊楽部で学校を開設する。 ・10月、札幌県が文部省に対しアイヌ教育の補助金（年4000円）を申請。
1883	16	・2月　函館・札幌・根室の3県が連名で宮内省に対してアイヌ教育の「基本金」を申請。→3月　宮内省から三県に対し1000円を「下賜」。追って文部省が3000円を下付。 ・この年、函館県は遊楽部のアイヌ学校を公立とする。
1884	17	・ジョン・バチラー、著書『蝦夷今昔物語』を発行。 ・この年、政府が北千島のアイヌを色丹島に強制移住。
1885	18	・この年、札幌県が学務課御用係遠藤正明を平取学校に派遣、アイヌ児童教授方法の調査に従事させる。
1886	19	・政府が三県を廃止、北海道庁を設置する。 この年、「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率9.2%
1887	20	・北海道庁、「小学校規則」「小学簡易科教則」などを定める。北海道内の公立小学校260校中10校以外を全て簡易科に指定。従来の小学校への補助金を廃止する。
1888	21	・山越内八雲二村戸長役場、遊楽部小学校を「組織変更」し、農業就産を中心とした「取締所」の設置を計画。（この後、1890年頃に休校か） ・幌別（現登別市）にアイヌ児童を対象とした小学校「愛隣学校」が開設される。
1891	24	・聖公会が釧路の春採にアイヌ学校を設置。
1892	25	**・聖公会が函館の元町にアイヌ学校を設置。ネトルシップを校長とする。** ・前年設立の北海道教育会、「旧土人教育取調委員」を設置。委員に岩谷英太郎、永田方正。 ・12月、北海道庁、道内のアイヌ児童が多数就学する学校の幾つかに経費の補助を始める。八雲の遊楽部ではほぼ全額を補助、シャモ（和人）の児童を八雲小学校に通わせ、遊楽部をアイヌ児童のみの学校とする。同じころ、日高・平取の二風谷、様似の岡二などに学校設置。
1893	26	**・聖公会が谷地頭に校舎を新築、元町のアイヌ学校を移転させる。** ・公立遊楽部尋常小学校に対する北海道庁の補助が教員給与のみとなる。再びシャモの児童も収容する。 ・北海道教育会、旧土人教育取調委員による報告書「あいぬ教育ノ方法」を『北海道教育雑誌』第9号に掲載。（のち、岩谷英太郎の名で『東京茗渓会雑誌』第128号にも掲載。） ・この年の「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率　20.7%
1894	27	・北海禁酒会が札幌で演説会を開催、北海道庁理事官白仁武「アイヌ人保護」のほか、ジョン・バチラー、岩谷英太郎らによる演説が行われる。
1899	32	・3月、「北海道旧土人保護法」公布 ・8月、「私立学校令」公布 ・この年、東本願寺が僧侶奥村円心を色丹島に派遣、ハリストス正教会の信者が圧倒的に多いとされた、色丹の北千島アイヌに対する布教に従事させる。（1901年、ほとんど「成果」を挙げずに離任。）
1900	33	**・谷地頭のアイヌ学校、私立学校令に対応して学校の組織を変更。** ・この年、小谷部全一郎の主唱による「北海道旧土人教育会」設立。会頭に二條基弘、幹事に加藤政之助、坪井正五郎、島田三郎らが名を連ねる。札幌にアイヌ児童を対象とした実業補習学校の設置を計画（のち虻田村に場所を変更して設置）。
1901	34	・「旧土人児童教育規程」制定、「北海道旧土人保護法」第9条に基づく小学校の設置開始。
1902	35	・この年の「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率　54.6%（初めて50%を超える）。
1905	38	**・この年6月24日に谷地頭アイヌ学校が閉鎖されたという。**
1906	39	・私立春採尋常小学校、公立となる。
1908	41	・「旧土人児童教育規程」廃止、「特別教育規程」にアイヌ児童の教授課程に関わる規程を統合。
1910	43	・この年の「北海道庁統計書」上での全道アイヌ児童就学率、90%を超える。

出典：小川『近代アイヌ教育制度史研究』（北海道大学図書刊行会、1997年）、北海道『新北海道史年表』（北海道出版企画センター、1989年）をもとに、仁多見巌『異境の使徒　英人ジョン・バチラー伝』（北海道新聞社、1991年）、『函館市史　通説編第3巻』、『函館毎日新聞』などを参照して作成。

アイヌ学校職員と生徒（函館市中央図書館所蔵）



1924 年当時の谷地頭町地番図（冨原章 1998『箱館から函館へ』より）

〈資料紹介〉

市立函館博物館所蔵〈アイヌ風俗絵馬〉について

春木　晶子

アイヌ風俗絵馬

市立函館博物館所蔵の〈アイヌ風俗絵馬〉【図１】（26頁）は、道内の絵馬としては比較的古い奉納年が記され、初期のアイヌ絵としても貴重な資料である。この絵のテーマは何か。誰が何のために奉納したのか。考えられる可能性を示す。

絵馬の大きさは、黒縁の額を含み94.5×141.5cm、画面は80.0×127.0cmあり、板を継ぎ、その表面に紙を貼り画面としている。画面上部には「奉献」の文字が朱色で記され、さらに画面右端に「安永四乙未年正月吉日」、左端に「藤原政展」との墨書きがあり、安永4年(1775)1月に藤原政展なる人物が奉納した絵馬であることがわかる。奉納先は不詳だが、道南の神社に所蔵されていたという。

画面左には甲冑姿の武者、対して画面右には5人の人物が描かれている。武者の胸元に大きく施された笹竜胆は、源氏の家紋であり、歌舞伎や錦絵で源氏の登場人物を示す目じるしである。兜には、大きな二股と龍の飾りがあり、これは、甲冑姿の源義経を示すシンボルである。右側の5人はいずれも、赤白青などの幾何学文様の施された茶系の衣をまとい、耳飾りをつけている。男性は左右の眉がつながり、口髭をたくわえ、女性は唇と手の甲に刺青を施している。武者の白い肌に比べて5人は暗い肌色をしている。こうした描写は、江戸時代中期以降に描かれたアイヌ絵の特徴と一致し、和人のアイヌに対する紋切型のイメージを反映している。

義経とアイヌ

この絵馬には、アイヌと義経が描かれている。この組み合わせは珍しく思われるかもしれないが、義経と北海道という組み合わせは珍しいものではない。北海道には、各地に義経にまつわる伝説が伝承されており、義経山や義経岩、義経神社や「義経号」という名のSLまでもが存在した。源義経（1159-1189）といえば、平安末期、機知に富んだ戦術で平氏を追討しながらも、兄頼朝との不和から都を追放され、奥州平泉で自害し31歳でこの世を去った人物だ。その悲劇的な生涯は人々の同情を集め、彼を英雄視する伝説が数多く生まれた。中でも「義経蝦夷渡伝説」―義経は平泉で死なずに蝦夷地に渡り、その地で大王と仰がれ、後に神として祀られた―は、義経の死にまつわる伝説のうち最も流布したものとされる。

改めてこの絵馬を見ると、義経に向かってひざまずく3人は、儀礼の際に見られるアイヌの祈りのポーズ（掌を上にして指を軽く曲げる）をとり、義経に敬意を示しているようである。義経とアイヌの間には、3本の巻物と赤い鯛がそれぞれ漆器の膳と木彫りの台に載っており、アイヌが義経へ差し出しているように見える。

道内にはこの巻物が登場する義経伝説が伝わっている。増毛町には、義経がアイヌから巻物を奪い魔法を使えなくしたという話があり、白老町や平取町には、義経がアイヌの巻物を持ち去ったために、アイヌの文字がなくなったという話がある[1]。また、絵馬の画面右端には男女のアイヌがいる。

男性は女性の頭を撫でながら顔を覗き込み慰めるような様子だが、女性の視線は男性には向けられていない。北海道には、義経に心を寄せたアイヌ女性の悲恋の物語が数々あり、別れの悲しみのあまり海に身を投げて岩になった（積丹岬の女郎子岩、神威岬のメノコ岩）話などがある[ii]。この絵馬の女性は、義経に思いを馳せる女性ではないだろうか。

以上のことからこの絵馬には、道内に伝承する義経伝説が描かれていると言える。

もう一つの絵馬

この絵馬の制作地や奉納先を考えるにあたり、手がかりとなる絵馬がある。上ノ国町の上ノ国八幡宮に現在も掲げられる絵馬【図２】（27頁）である。以下、これをく上ノ国八幡宮所蔵絵馬〉と呼ぶ。〈アイヌ風俗絵馬〉の奉納から100年以上も後に奉納されたにも関わらず、〈上ノ国八幡宮所蔵絵馬〉には〈アイヌ風俗絵馬〉と同様の義経とアイヌが描かれている。

〈上ノ国八幡宮所蔵絵馬〉は、額を含み86.1×133.3cm、画面は72.6×120.0cmで、「アイヌ風俗絵馬」より若干小さい。画面には「奉納」「明治十五年三月吉日」「久末平蔵」の墨書き、さらに裏面に「寄進若宮八幡宮」「為病気平癒納之」「久末平蔵」「本年五十九才」の墨書きがある。これにより、久末平蔵なる人物が、59歳の時に、病気が治ったことの感謝のしるしに、この絵馬を奉納したとわかる。久末平蔵は『続上ノ国村史』掲載の「明治九年十月調漁業取獲高調帳」にその名があり、大澗と原歌で鰊刺網漁を営んだ人物と確認できる[iii]。

〈上ノ国八幡宮所蔵絵馬〉には〈アイヌ風俗絵馬〉の男女のアイヌの姿がなく、代わりにこどものアイヌが描かれている。また、鯛も描かれていない。しかし、共通して描かれる義経とひざまずく3人のアイヌの姿は酷似している。装身具の装飾や文様の形状・彩色、衣文線の入れ方などに違いはあるが、大まかな線の位置が一致し、画面自体の大きさは異なるものの、二つの絵馬を重ねると、義経とアイヌはほぼ同寸である。

二つの絵馬は、100年の歳月を超えて同じ図を共有している。この図は、上ノ国町もしくはその周辺で、長く継承されてきた図なのかもしれない。

義経蝦夷渡伝説図

なぜ二つの絵馬には義経蝦夷渡伝説が描かれたのだろうか。ここで、この伝説を描いた絵の歴史を簡単に紹介したい。

義経蝦夷渡伝説は、江戸時代、元禄年間(1688-1704)以降に史書に書かれて知られるようになり、その後、本の挿絵や錦絵にこの伝説を描いたものが登場した。今、仮にこれを「義経蝦夷渡伝説図」と総称する。「義経蝦夷渡伝説図」は、絵の内容から、大きく三つのグループに分けることができる。

一つ目は、船に乗り込んだ義経一行が蝦夷島に渡る場面を描くもので、早くは『絵本義経記』（安永2年(1773)、北尾重政画）の挿絵に見られ、錦絵にも描かれた[iv]。義経の生涯を双六にした『義経一代勲功双六』（安政3年(1856)、歌川芳貞画）では、「上がり」のコマがこの図となっている。二つ目は、蝦夷島に渡った義経一行と蝦夷人との合戦を描いたもので、複数の錦絵が現存する[v]。三つ目が、義経とそれにひれふすアイヌという〈アイヌ風俗絵馬〉に類する図で、二つの絵馬の他には、嘉永6年(1853)『蝦夷勲功記』（永楽舎一水著/橋本玉蘭画）の挿絵や松浦武四郎の『蝦夷訓蒙図彙』（安政4年(1860)頃）の挿絵、三笠の幌内神社に明治19年(1886)に奉納された〈義経蝦夷渡り伝説図絵馬〉、明治26年(1893)橋本芳園筆の〈蝦夷風俗絵巻〉などに見出せる。

この三つ目のグループは北海道に伝わる絵馬や、北海道を訪れた松浦武四郎など、北海道との関わりが深い作例に見出すことができる。また、作例が幕末から明治に集中しており、〈アイヌ風俗絵馬〉だけが飛び抜けて早い制作年を示している。

為朝図像の利用

〈アイヌ風俗絵馬〉は義経とアイヌが対峙する図の初期の作例であり、同時期の類例を見出すことができない。本作の作者は、武者とそれにひれふす人物という構図を持つ他の画題の作品を参考に、この絵馬を制作したのではないか。

例えば、平安末期の武将・源為朝は、疱瘡（天然痘）を除ける神として信仰され、江戸時代には、為朝が疱瘡神を退治する、もしくは威圧する場面を描いた絵馬や版画が数多く作られた。〈アイヌ風俗絵馬〉より後の作例になるが、歌川国芳の錦絵〈為朝と疱瘡神〉[vi]は、画面左に為朝を配し、右側では老人と子供の姿をした疱瘡神が為朝にひれふす、類似の構図をとっている。

疱瘡神の姿はさまざまで、老人やこどもの他、鬼の姿で描かれることも多い。また疱瘡はエミシ（蝦夷）やエビス（夷）の国から来るという考えがあったという[vii]。老人やこどもは死後、あるいは生前の世界に近く、鬼は異界の住人である。そして、エミシやエビスは遠い未知の土地、ここではない場所の住人であり、いずれもこの世の周縁、またはその近くの存在と考えられた。

また、〈為朝と疱瘡神〉には、疱瘡神が苦手とする犬やみみずく、疱瘡神が嫌う赤色の餅、だるまなどが描かれている。赤は、疱瘡除けの効能があると信じられ、だるま人形や赤べこなどの子供の玩具には赤が多い。疱瘡除けに効があるとされた人物や動物、玩具などを赤一色で刷った版画は「赤絵」という護符として用いられていた[viii]。赤い鯛もまた、疱瘡除けの役割を担ったものの一つで、鯛に車をつけた「鯛車」という玩具がある。〈為朝と疱瘡神〉にも鯛が描き込まれている。そして〈アイヌ風俗絵馬〉の画面中央にも赤い鯛が描かれていた。鯛は「めでたい」との語呂合わせで縁起の良いものであり、正月を祝う歌が添えられた「鯛車」の赤絵が現存する[ix]。この赤絵は、疱瘡除けの「鯛車」と吉祥性の強い正月を結びつけ、疱瘡除けの効果を強めようとする意図があったと指摘されている[x]。〈アイヌ風俗絵馬〉の奉納も正月であった。

この絵馬が奉納された18世紀、疱瘡はかなり頻繁に流行し、多数の被害が出ていた。また同様の図を描いた〈上ノ国八幡宮所蔵絵馬〉の奉納理由は病気平癒のためであり、この図が病の治癒に関係があった可能性を示唆している。以上のことを考え合わせると、〈アイヌ風俗絵馬〉は「義経蝦夷渡伝説」にヒントを得て、為朝を義経に、疱瘡神をアイヌに置き換えた、北海道版の「為朝と疱瘡神」と見ることができるのではないだろうか[xi]。

奉納者・藤原政展

最後に絵馬に記された「藤原政展」について述べる。安永4年（1775）を生きた「藤原政展」として、出羽国本荘藩を治めた六郷氏の一員、六郷政展（まさのぶ）（1751-1776）が挙げられる[xii]。政展は、次期藩主として将軍への謁見を終えていたにも関わらず、安永5年（1776）3月、26歳の若さで死去している。六郷氏の本姓は「藤原」である。六郷氏が崇敬した本荘藩領内の日住白山神社や八幡神社には、代々藩主が奉納した絵馬が多数現存しており、その大半が奉納者名に「六郷」ではなく「藤原」を用いている。四代藩主政晴、政展の父の五代政長、政展の養父の六代政林（まさしげ）、七代政速（まさちか）いずれもが、「藤原政〇」の名で、絵馬を奉納している[xiii]。

六郷氏が治めた本荘藩には北前船の寄港地の象潟もあった。象潟は北海道との縁の深い地域で、寛文9年(1669)に象潟から北海道に渡った漁夫18人がシャクシャインの戦いにまきこまれて犠牲になったほか、寛政2年(1790)に象潟を訪れた尊王思想家の高山彦九郎は「塩越町（現在の象潟町）500軒余りのうち300人が松前に行って稼いでいる」と記録している[xiv]。また、「たたみ倉」と呼ばれる家倉は、その構造と呼称が象潟を含む由利地方の海岸部と、北海道の上ノ国町のみに伝わるという[xv]。

政展の死因は不明だが、〈アイヌ風俗絵馬〉は政展が亡くなる約1年前に奉納されている。ここで、この絵馬が疱瘡除けの祈願だった可能性が思い起こされる。これは筆者の仮説に過ぎないが、疱瘡を恐れた政展は、遠く蝦夷地に疱瘡除けに効く社寺の存在を知り、蝦夷地の義経伝説になぞらえてこの絵馬を仕立てさせ、蝦夷地に渡る何者かに託したのではないか。

この仮説について検討をすすめるとともに、本作の絵師についても、調査をすすめていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、市立函館博物館の職員の皆様、上ノ国八幡宮の松崎辰彦宮司、上ノ国町教育委員会の塚田直哉学芸員には、資料調査にご協力をいただいたうえ、多くのご助言をいただきました。また2006年に逝去された北海道開拓記念館職員の林昇太郎氏の調査資料より多くの示唆を受けました。末尾ながら記して感謝申し上げます。なお本稿には科学研究費補助金・若手研究（B）「画像資料の分析による「義経蝦夷渡伝説」の受容についての研究」(2012-14年度、課題番号24720685）の調査研究成果の一部を使用しました。

（北海道開拓記念館学芸員）

i）阿部敏夫『北海道民間説話〈生成〉の研究伝承・探訪・記録』（共同文化社、2012、p.165）

ii）註i前掲書pp.162-163

iii）松崎岩穂『続上ノ国村史』（北海道檜山郡上ノ国村役場、1962、pp.153-154）

iv）歌川芳虎《源義経蝦夷渡海ノ図》［天保14-弘化4年(1844-48)］、歌川芳雪《源之義経蝦夷征罰之図》［嘉永元-5年(1848-52)］

v）歌川国富《源義経蝦夷国渡海合戦之図》［文政-天保(1818-44)］、歌川貞秀《蝦夷地渡図》［文政9年-天保13(1826-57)］

vi）H.O.ローテルムンド『疱瘡神江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』（岩波書店、1995）所載。

vii）Hartmut O. Rotermund『第15回日文研フォーラム江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題』（国際日本文化研究センター、1993、p.1）

viii）疱瘡神信仰については、註vi前掲書pp.54-58、pp.109-127を参照。

ix）註vi前掲書所載。

x）註vii前掲書p.22

xi）筆者は以前、源義経とアイヌを描いたと伝えられる絵の武者が、義経でなく源為朝であることを指摘したことがある。（山際晶子「余市町教育委員会所蔵の《アイヌ絵（武者のぼり下絵）》について」『北海道開拓記念館研究紀要第41号』（北海道開拓記念館、2013））

xii）『本荘市史史料編Ⅱ』（本庄市、1982、p.57、p.101）同書所収の「寛政重修諸家譜巻第八百八十九」、「六郷家譜」を参照。

xiii）大矢邦宣編『本荘市史神社仏閣調査報告書』（本荘市史編さん室、1998、pp.25-27、pp.100-114）

xiv）『象潟と北海道菅江真澄らの記録から』展図録（象潟町郷土資料館、2005、p.2）

xv）村上孝一「たたみ倉―北海道上ノ国町と秋田由利地方との比較研究―」『北海道開拓記念館研究年報第21号』（北海道開拓記念館、1993）

図1　〈アイヌ風俗絵馬〉　市立函館博物館所蔵

図2　〈上ノ国八幡宮所蔵絵馬〉　上ノ国八幡宮所蔵

〈研究ノート〉

北洋博覧会のアイヌ館

大矢　京右

はじめに

これまでそれほど多く取り扱われることの無かった函館とアイヌ文化の繋がりについて論考する際、特に時代を現代に限定すると、「観光」が極めて重要な要素となる。観光を仲立ちとした函館とアイヌ文化の繋がりについては大矢 2014 などの先行研究があるが、本稿は函館が従来の水産業や造船業から観光業へと大きく基幹産業の舵を切る端緒となった 1954(昭和 29)年開催の北洋漁業再開記念北海道大博覧会(以下「北洋博」)と、そこにアイヌの協力の下で設置された「アイヌ館」[1]について紹介するものである。

1．北洋博覧会

1-1. 北洋漁業と函館

1905(明治 38)年の日露講和条約(ポーツマス条約)で日本がオホーツク海沿岸や沿海州に漁業権を獲得したことにより、函館はいわゆる北洋漁業の基地として経済的発展を遂げた。産業に関しては水産加工業や造船業だけでなくそれらに付随する製網業や電気産業なども隆盛を極め、これらに従事する労働者の居住と経済活動も函館の成長を支えたといえる。

その後 1936(昭和 11)年の日独防共協定締結による日ソ関係の悪化や 1941(昭和 16)年の太平洋戦争開戦による船舶ならびに人員不足のため漁獲量が落ち込み、1945(昭和 20)年の敗戦による漁場の喪失やマッカーサーラインの設定などで、北洋漁業は大きなダメージを受けることとなる。北洋漁業の沈滞はそれに依存していた函館の経済にも大きな影響を与え、北洋漁業の再開は函館市民の渇望するところであった。

1952(昭和 27)年のサンフランシスコ講和条約発効によりマッカーサーラインが廃止されるなどし、北洋漁業が再開されると、再び函館はその盛況を取り戻した。戦前と異なり、母船で生産された缶詰の揚陸地が東京や横浜などの大都市圏になるなど、北洋漁業における函館の地位は比較的低下したものの、それまでの経済的不況や市民間の停滞ムードを振り払うには十分なインパクトをもったものであった。【函館市史編さん室編 2002】

1953(昭和 28)年の出航風景
【函館市中央図書館所蔵】

このような状況下、「市の経済の起爆剤」「活性化のための一大カンフル剤」【原田ほか 1988:114】として、北洋博の開催が計画されていくのである。

1-2. 開催概要

北洋博は北海道・函館市・函館商工会議所が主催となり、「北洋漁業の再開を記念し、日本水産業の振興並びに科学・文化の向上に資すると共に国内産業の現況を広く内外に紹介し、もつて国運の進展に寄与する」【北洋漁業再開記念北海道大博覧会総務宣伝部編1955】ため、1954(昭和29)年7月10日から8月31日まで、函館公園と函館市民運動場(現在の函館市立潮見中学校)を第一会場、五稜郭公園を第二会場として開催された。第一会場には北洋館など27の施設、第二会場には観光館など11の施設が設置され、東北地方を中心とした全国的な出品勧誘および宣伝活動を行った結果、開催53日間でおよそ80万人の入場者数であったという[ii]【同前】。

北洋博第一会場メインゲート
【市立函館博物館所蔵】

企画にあたっては、当時の北海道知事を総裁、函館市長を会長に戴き、主に函館市職員をもって北洋博事務局を立ち上げ、「会場の構成設計、展示等の企画は市職員の研究向上をはかる意味から、特に専門家に委嘱せずに市職員が主体となり、各館シナリオより展示完成、期間中の維持管理まで担当する方針」をとった【同前】。

1-3. 函館観光における北洋博の位置づけ

古くから連絡船ならびに国鉄の発着地などとして北海道の玄関口としての地位を確立していた函館は、近・現代的な観光拠点として必要とされる要素を備えていたといえる。特に明治期以降要塞地帯として立ち入りが禁止されていた函館山が1946(昭和21)年に立ち入り解禁されたことや、五稜郭跡が1952(昭和27)年に国特別史跡に指定されたことなどは、戦後高度経済成長期における観光振興の素地を形成したとともに、現代の函館観光にもつながる重要なコンテンツとなっている。

このような中で開催された北洋博は、北洋漁業が再開されたとはいえまだまだ脆弱な経済基盤であった函館としては破格の3億円という予算をかけた、まさに乾坤一擲の事業であった。そしてその経済効果は「三億円くらいの予算でやったけど市内に落ちた金というのは十倍くらいで経済的な効果はあった」【原田ほか1988:110】と市民に実感せしめ、旅館・旅客業といった関連観光業への波及やインフラ整備の拡大はもとより、北海道観光における函館の全国的な知名度の上昇にも寄与したと考えることができる。北洋漁業に頼りきった戦前の函館の産業・経済は、戦後の北洋漁業再開によって灯った経済の種火を北洋博という「起爆剤」で熾すことにより、戦後からの経済的復興を果たすとともに基幹産業の転換を果たした。そういう意味では、北洋博が現在の観光を主産業とする函館への一大転換点であったという評価はあながち言い過ぎでもあるまい。

2. アイヌ館

2-1. 企画と準備

2-1-1. 開館の経緯

前述の企画方針のとおり、アイヌ館も市立函館博物館（以下「博物館」）の武内収太館長（当時）が管理責任者として、同じく同館の石川政治・姫野英夫両学芸員が主幹

となって企画・展示を行っている[iii]。

北洋博における各施設がどのような流れで設置申請・許可されたかは不明であるが、アイヌ館に関しては博物館が既存の先住民族館（現在の旧函館博物館２号）を利用した「アイヌ民族館」と水産館（現在の旧函館博物館１号）を利用した「北洋民族館」の開館を北洋博事務局に申請したところから始まる[iv]。この時に附されたと考えられるアイヌ館の企画書にはその設置目的として「アイヌ民族は世界人類学上最近特に注目されて研究の対象となっている　特に内地人の人々は北海道と云へばアイヌと直ちに連想するほど関連の深い先住民族である然るに現在はこの民族固有の風俗習慣は年々和人風に融合しつつあり　本道に於ても昔ながらの姿を見ることは困難となって内地観光客を失望させている。市立博物館の収蔵する資料はその歴史の古さと、質・種類の点で本道一の定評がある。この資料を活用して特有なアイヌ民族の風俗を再現してアイヌ民族を認識せしめることは専門家は勿論一般観衆には最も興味深い北海道特有のものであろう。」との記述があり、添付された「アイヌ館予算概算書」（稿末図表１）からは「アイヌ等身大人形」や「アイヌ住居」、その他材料費など合計 830,700 円が予算計上されていることがわかる[v]。

北洋博事務局は 1954(昭和 29)年４月 19 日付博出第 436 号文書にて、①アイヌ館を 40 万円以内で開設すること②水産館を現状で開館すること（予算計上無し）③両館の外装化粧は既定予算内で施工することの３点を北洋博文化部長宛に通知し、これに対して博物館は同月 23 日付で①水産館は手狭で既存の展示だと北洋博のテーマにも合わないため北洋博期間中は閉館したいこと②予算僅少のため既定予算を全額アイヌ館に傾注したいこと③水産館の資料は関係新設館に貸与可能であることの３点を事務局に陳情している。この陳情がどこまで容れられたかについての回答文書は確認されていないが、実際に水産館の開館は免れ、最終的にアイヌ館に 399,884 円の予算が注ぎ込まれたことを考えると、結果的には博物館の陳情は受け容れられていたと考えて良いだろう。

水産館（1933 年撮影）
【函館市中央図書館所蔵】

2-1-2. 展示コンセプトと準備

アイヌ館の展示コンセプトは同館の企画書に①「北海道の博物館として特色有るアイヌ家屋をアイヌ人の手によって再現保存する」②「アイヌ特有の風俗習慣を六つのヂオラマに表現する」③「人物は等身大人形として博物館資料の実物を配して表現する」④「アイヌ風俗写真をヂオラマに併用して真実の姿を認識せしめる」の４点が挙げられており、これに基づき８段階に及ぶ展示構想（稿末図表２）が当初計画されている。

しかし、希望額の半額以下に抑えられた予算配当に直面したことから、1954(昭和29)年６月中に新たな展示計画立案と見積を行い、それに基づいた予算再編成を行った。北洋博事務局からの通知後に作成されたであろう『北洋博綴』中「北洋博アイヌ民族館予算書」(稿末図表３)には総額を40万円に抑えられた内訳が書かれており、企画を担当した

石川政治は「北洋三館のテーマ館はとにかく、他館は四分の一、五分の一程度の雀の涙ほどの予算で」「やり繰算段に閉口した」という【北洋博事務局総務部編1954a】。結果から言うとおそらくこの予算書か、もしくはこれに近い内容のもので決裁を得て、企画はスタートしたと考えられる。

博物館は1954(昭和29)年6月10日付北洋博第2号起案で「アイヌ民族館整備のための資金前渡金」として25,000円の支出伺いを行い（北洋博文化部長決裁印押印）、当初費用を確保。また、同月19日付函博第6号文書で市立青柳小学校長隅田雄次郎に対して6月19日から9月5日の間における博物館陳列戸棚22個の保管を依頼し、同月21日付函博第7号文書で函館商科短期大学主事土田秀雄に対してアイヌ館の背景画を同学助教授木村捷司に委嘱する旨依頼するなど、具体的な展示の準備に取りかかった。

2-2. 展示作業

2-2-1. 展示資料調達

当時の写真などから、館内で展示された資料は基本的に博物館所蔵資料であったことがわかっているが[vi]、一部資料や展示用写真などは別途調達されている。

所蔵資料以外の展示資料として北洋博予算から新たに購入・調達されたものは、「アイヌ風俗写真」（台紙付四切20枚・台紙付全紙大6枚、6月24日付）、「狐剥製」と「アイヌ犬剥製」（各1頭分、7月2日付）、「アイヌ鉢巻」（5点、7月13日付）、「イナウ」（5点、札幌在住のアイヌ研究家河野広道から購入）であり、さらに博物館予算からも6月10日付で杵（2点、3,000円）と臼（1点、4,500円）を新たに河野広道から購入した記録がある。また『北洋博綴』中の起案書および借用書控をみてみると、函博第8号文書で北海道大学付属博物館長に借用願を提出し、運賃および荷造費用負担の上で6月30日から9月15日まで「熊剥製」を借用、展示していることが確認できる。

これらの新規調達資料のうち、博物館予算で調達された杵と臼が博物館に現存しているのはもちろんであるが（民族477・478「杵」と民族486「臼」）、北洋博予算で調達された木幣も北洋博終了後に博物館に「保管転換」[viii]され、現存している（目録未掲載）[ix]。

アイヌ館内展示状況
（背景の器物や人形の衣服などは博物館資料）
【函館市中央図書館所蔵】

2-2-2. 背景造作等

最終的にアイヌ館開館に要した費用は、『北洋博綴』中「北洋博アイヌ館債務確定控」（前出図表4－1）におおまかな内訳が掲載されており、アイヌ館決算額399,884円のうち実に約4分の3にも及ぶ297,000円が「ヂオラマ請負費」として計上されている。『北洋博綴』中「北洋博アイヌ民族館ヂオラマ工事仕様書」には①ヂオラマ彫刻人形工事200,000円②装飾ヂオラマ舞台工事61,500円③入口看板工事5,000円④背景工事30,860円の合計297,360円という記述があり、360円の誤差があるものの、おそらくこれが「ヂオラマ請負費」の内訳にあたると考えていいだろう。『北洋博綴』の中には①～④それぞれの項目に該当すると考えられる

仕様書や見積書、工事内容指示書なども散在しており、それぞれの工事内容が以下のとおりある程度見て取れる。

①ヂオラマ彫刻人形工事200,000円については関係資料として「アイヌ館ヂオラマ彫刻見積書」（石膏着色仕上げ等身大アイヌ男性人形３体60,000円、同アイヌ女性人形６体120,000円、同アイヌ子供人形２体20,000円）と「人形制作費」（彫刻10体分100,000円、着色料10体分20,000円、台と心棒10体分20,000円、人形着付け河野博士指導３回60,000円）がある。いずれも合計金額は同じ200,000円であるものの、実際の作業がいずれの内容に沿って行われたかについては判然としない。

②装飾ヂオラマ舞台工事61,500円については関係資料として６月23日付「宮下宣伝社見積書」（ベニヤ板150枚外一式木材代47,800円、大小４貫匁釘1,120円、大工工料13人工10,400円、諸雑費一式2,180円）と「北洋博アイヌ民族館装飾工事内容」（ベニヤ張付工事、天井工事、手摺工事、仕切工事、床工事、材料）がある。特に後者には材料となる木材のサイズと数量も明記されており、前者と合わせて内容を検討する必要がある。

③入口看板工事5,000円については関係資料として６月24日付「宮下宣伝社見積書」（アイヌ館入口看板３枚一式5,000円）がある。仕様として３×12尺ベニヤ張ペイント仕上げ１枚と３×６尺ベニヤ張ペイント仕上げ２枚が明記されており、サイズを勘案するとおそらく後者の１枚はアイヌ館入口の半円形窓にはめ込まれたものと推測される。

④背景工事30,860円については関係資料として「北洋博アイヌ民族館背景工事内容」（内容：運搬の背景10,000円・餅つき/アイヌ楽器吹奏背景10,000円・狩猟の背景10,000円・熊祭りの背景10,000円・織物の背景10,000円、材料、描画坪数10坪、助手２名使用）と「背景工事仕様書」（内容：運搬の背景・餅つき/アイヌ楽器吹奏背景・狩猟の背景・熊祭りの背景、材料費16,500円、助手手間代4,000円、画家技術料30,600円）がある。前者が５種の背景で50,000円であるのに対し、後者は４種の背景で51,100円となっており、①同様いずれの内容で作業が行われたかについては判然としない。推測の域を脱しないが、「北洋博アイヌ民族館ヂオラマ工事仕様書」の「背景工事仕様書」の画家技術料30,600円が背景工事30,860円と260円の差額であることから、その他材料費などを消耗品などに振り替えて、画家技術料のみを背景工事費として計上したとも考えることができる。

アイヌ館外観
（入口上に半円形の看板が掲げられている）
【函館市中央図書館所蔵】

2-3. アイヌ館開館

2-3-1. 展示内容

函館市中央図書館所蔵『北洋博関係一括資料』によると、前述の作業を通じて完成したアイヌ館には、博物館所蔵「アイヌ被服・器具・武器その他」81点、北大附属博物館所蔵「羆」１頭、河野広道所蔵「熊祭り道具」一式が展示されたとある。当初の８段階の展示構想からどのように変わったかについては確たる資料がないが、『北洋博写真集』には「まづ館に入って直ぐ目につくのは部族伝統の宝物を始め、被服・器

具武器類から熊まつりの道具に及ぶ蒐集品の展示である。又アツシを着たもの、子供を背つたもの、犬をつれて熊狩りをしているもの、炉辺に夕餉をとつているものなど等身大の人形は全て企画者たちが自身で製作したものであり、住居の内部や熊狩りの模様など、風俗、生活をそのまま面白く見せていた。ほかにアイヌ人による木彫り熊の製作実演と即売を行って人気を博した。」【北洋漁業再開記念北海道大博覧会総務宣伝部編 1955】とあり、北洋博開催期間中に刊行されていた『北洋博ニュース』には「アイヌ館（先住民族館）に入ると、すぐ目につく様に宝物が飾られてあります」【北洋博事務局総務部編 1954b】とある。これらの記述や函館市中央図書館所蔵のアイヌ館内部写真などから得られる情報を総合すると、稿末図表５「アイヌ館模式図」のような内部構成であったと考えられよう。

また支出状況からは、館内で四つ切り写真（392mm×542mm）20 枚と全紙写真（457mm×560mm）６枚も展示していたことがわかるが、『北洋博綴』の中には手書きの内訳（稿末図表６）があり、棒線で削除されているものを除けば数量は合致している。しかし、写真の出典や、それぞれどこに展示されたかなどについては情報が残されていない。

2-3-2. 砂澤家の協力

アイヌ館の展示作業および北洋博期間中の木彫り実演については、当時函館の湯川地区で土産物店を経営していた旭川出身のアイヌ川村泰一の両親である、砂澤智一郎・クラ夫妻が協力している[x]。

開館準備に先立って博物館は、６月 12 日付北洋博第３号起案で「謝礼金支出について」として、砂澤智一郎他一名の６月 21 日から 30 日までの展示指導・協力のために 7,000 円の支出伺いを行うとともに、北洋博第５号起案で「アイヌ館内熊彫り実演者に對する経費支出について」として、砂澤智一郎の７月 10 日から８月 31 日までの実演料のために 25,000 円の支出伺いを行っており、これらの金額については「北洋博アイヌ館債務確定控」にも「謝礼金」と「賃金」として同額の支出が確認される。

７月 10 日から８月 31 日までの期間中、砂澤夫妻はアイヌ館附属の居住スペース[xi]で寝泊まりしていたとのことであり、夫妻のご令孫である砂澤代恵子氏は当時を以下のように述懐している。

「北洋博の期間中、じいちゃん（智一郎）とばあちゃん（クラ）はアイヌ館の裏手にあった小屋（６畳一間くらいで台所スペースがあった）で寝起きしていました。じいちゃんとばあちゃんに会いたくて、夜中に青柳町電停から歩いて会場に行き、門番のおじさんに入れてもらった記憶があります。」「じいちゃんとばあちゃんは開場から閉場までアイヌ館でひっしり実演をして、昼食は裏手の小屋で食べていました。」「アイヌ館では漆塗りの盆や絵はがきなども販売していました。客で混雑することはありませんでしたが、途切れずに入ってきていたので結構繁盛したようです。」[xii]

アイヌ館で実演する砂澤智一郎
【砂澤代恵子氏所蔵】

また当事者である砂澤クラも、この時の状況について自らの著書の中で以下のように述懐している。

「昭和二十九年の夏には函館で博覧会（北洋漁業再開記念大博覧会）があり、うちも店を出しました。私が店に座ってイカラカラ（刺しゅう）をして見せ、大学生の娘さんが店番についてくれました。真っ黒になるほど人が寄って、木彫りのクマはどんどん売れますし、私には給料が出る、で、ほんとうに助かりました。」【砂澤 1983: 281】

なお、この時にアイヌ館で展示されたかどうかは記録がないが、博物館には 1954（昭和 29）年に砂澤智一郎から寄贈された小刀が２点現存している。

３．函館とアイヌ文化の関わり

函館における観光産業の「起爆剤」「草分け」として評価される北洋博であるが、アイヌ館の存在を大きく取り上げた記録はほとんどない　。他の施設に比べて規模が小さかったことはもちろんであるが、先住民族館として博物館所蔵アイヌ資料などを従来から市民の観覧に供していたということで、目新しさがなかったということも事実であろう。ただし、1954（昭和29）年という高度経済成長の最初期ともいうべき時期にアイヌ文化を前面に押し出した特設館を設けたことは、後の北海道ひいては函館を訪れる観光客のアイヌ文化に対するニーズの形成に寄与したと評価して良いだろう。そしてこれは、1960年代の函館観光興隆期における函館とアイヌ文化の関わりの端緒ともいえる。

そして最も特筆すべきことは、地元のアイヌが準備段階から展示指導を行い、北洋博開催期間中も最終日まで木彫り実演という形で展示に関わりを持ち続けたということである。「展示企画やシナリオ構成などは専門家に委嘱せず、函館市職員主体で行うべし」とした北洋博の方針にある意味反するものであるが、博物館とアイヌによる協働という面で現在の時流に先駆けるものであったとはいえまいか。これは函館とアイヌ文化の関わりにおいて、看過しがたい非常に重要な事実を我々に示唆するものである。

おわりに

本稿を作成するにあたり、以下の機関および個人にはひとかたならぬご協力を頂いた。ここに記して謝意を表したい。（五十音順・敬称略）

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構　函館市中央図書館　岡田弘子　奥野進　砂澤代恵子　保科智治

なお本稿は、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の平成 25 年度研究助成採択事業「道南のアイヌ文化に関する総合的研究」の成果の一部を利用したものである。

（参考文献）

大矢京右2014「函館観光とアイヌ文化」『函館アイヌ文化研究会調査報告書　北海道南部のアイヌ文化を探る－道南のアイヌ文化に関する総合的研究－』pp. 16-26 函館アイヌ文化研究会;函館市

北野治編1954『函館商工名鑑北洋博記念号』　函館商工会議所;函館市

砂澤クラ1983『ク　スクップ　オルシペ　私の一代の話』北海道新聞社;札幌市

函館市史編さん室編2002『函館市史　通説編第4巻』函館市史編さん室;函館市

原田健三・北島博治・井上清1988「座談会・昭和二九年の“北洋博”を語る－北洋の街から観光都市へ－」『地域史研究はこだて』7 pp. 95-115 函館市史編さん室;函館市

保科智治2002「北洋博覧会の開催「北洋の基地」から「観光都市」へ」『函館市史　通説編』4

pp. 688-692 函館市史編さん室;函館市

北洋漁業再開記念北海道大博覧会総務宣伝部編 1955『北洋博写真集』 北洋漁業再開記念北海道大博覧会;函館市

北洋博事務局総務部編 1954a『北洋博ニュース』7 北洋博事務局総務部;函館市

北洋博事務局総務部編 1954b『北洋博ニュース』11 北洋博事務局総務部;函館市

市立函館博物館所蔵『五稜郭開館式関係』

市立函館博物館所蔵『昭和 29 年北洋博アイヌ館関係文書綴』

市立函館博物館所蔵『第貳場図面』

函館市中央図書館所蔵『北洋博関係一括資料』

（市立函館博物館学芸員）

---

i）同館については「先住民族館」「アイヌ民族館」「アイヌ館」など表記にばらつきがあるが、同館の看板が「アイヌ館」となっていることから、本稿では同名で統一する。

ii）北洋博は前売券と当日券で第一・第二会場共通入場券と第二会場入場券が発行されており、入場券の実売数はおよそ 51 万枚であったという【原田ほか 1988:105】。

iii）アイヌ館の展示内容については『北洋博写真集』に簡単に紹介されているが、情報は決して多くない。本項の内容は、主に博物館所蔵の『昭和 29 年北洋博アイヌ館関係文書綴』（以下『北洋博綴』）と『五稜郭開館式関係』（以下『五稜郭綴』）に合綴された起案書類や仕様書、メモや購入伝票類、また函館市中央図書館所蔵の『北洋博関係一括資料』などの情報を整理して得られたものである。合綴された書類・メモ類などは、順不同である上に下書き段階のものなども含まれているため、内容を十分に検討する必要がある。

iv）当時はまだ現在の博物館本館が落成しておらず、博物館は市立函館図書館内に事務室を置きながら、水産館と先住民族館で展示を行っていた。

v）概算書では要求額 830,700 円となっているが、実際に合計した金額は 866,620 円である。単純な計算間違いか他の合算要素があるかは不明。

vi）後述する博物館所蔵展示資料 81 点の内訳を示すものはないが、博物館に現存する資料とアイヌ館の住居内部ヂオラマ写真（函館市中央図書館所蔵）を比較すると、エカシ像の幣冠（民族46）・陣羽織（民族42）・帯（民族58）・脚絆（民族69もしくは70）、フチ像の樹皮衣（民族13もしくは14）・鉢巻（民族56）、背景の木綿衣（民族21）・刀掛帯（民族114・115）・行器（民族924・925）・炉鈎（民族241）などが展示されていたことが確認できる。

vii）北洋博予算におけるその他物品調達状況については、稿末図表４－１「北洋博アイヌ館債務確定控」および４－２「北洋博物品購入請求伝票」を参照。

viii）『五稜郭綴』中８月 30 日付北洋博第６号起案「アイヌ館資料一部保管転換について」として、北洋博の経費で調整・施工した一部資料・照明・施設を博物館に保管転換する旨起案されている。

ix）「アイヌ鉢巻」５点は所在が確認されていない。

x）川村泰一の函館における活動については、大矢 2014 を参照。

xi）旧函館博物館一号と二号にはかつて小型の別棟が附属しており、事務室や管理人室として使用されていた。1966（昭和 41）年に現在の博物館本館が開館し、旧函館博物館一号と二号で展示の必要がなくなった頃に別棟は撤去されたとのことである。（2013 年８月、元市立函館図書館長岡田弘子氏によるご教示）現在各建物の奥には別棟への扉のみが残存している。

xii）2013 年７月、砂澤代恵子氏によるご教示。

xiii）北洋博開催当時の新聞記事の中には、アイヌ館のことを取り上げた記事は確認できなかった。また博物館来館者の中で、北洋博を訪れた記憶のある方 10 名程度に聞き取り調査を行ったが、アイヌ館のことを記憶している方は皆無であった。

図表１．アイヌ館予算概算書（当初予算案）

品目	数量	単価	金額
アイヌ等身 1/5 人形	30 個	3,000	90,000
アイヌ等身大人形	9 個	40,000	360,000
狩猟用熊剥製	1 匹	40,000	40,000
狐剥製	1 匹	20,000	20,000
アイヌ犬剥製	1 匹	30,000	30,000
アイヌ住居	5 坪	20,000	100,000
写真四ッ切	30 枚	200	6,000
写真台紙	30 枚	150	4,500
松材 0.5x12 尺 巾 1 尺板	18 枚	240	4,320
松材 0.5x7 尺 巾 1 尺板	35 枚	180	6,300
松角材 3.5x1.5 12 尺	36 本	250	9,000
松角材 1.5x1.5 12 尺	45 本	100	4,500
松角材 0.8x0.8 12 尺	55 本	70	3,850
ベニヤ板 3x6 尺	89 枚	350	31,150
パック製作費	26 坪	3,000	78,000
人件費 1 日 3 人	275	200	54,000
パネル製作費 3x6 尺	8 枚	2,000	16,000
塗料費	30k	300	9,000
			866,620

図表２．アイヌ民族館企画書の展示構想

一．アイヌ民族についての概要図説（玄関壁面利用）
　３尺×６　四枚　３×３　一枚　四つ切写真
二．第一ヂオラマ（既設台）　熊祭り
　１．北海道の冬山背景　８×９
　２．熊祭るアイヌ人物　五分ノ一大人形　十五
　３．各種祭器と材料　五分ノ一大
　４．熊祭り写真　四つ切
　５．熊祭りの意義説明　３×６
三．第二ヂオラマ（既設台）　鶴の舞
　１．北海道の秋山風景背景　８×９
　２．踊る人物十五人　五分ノ一大人形
　３．アイヌ踊り写真各種　四つ切
四．第三ヂオラマ　住居内部
　１．アイヌ酋長夫妻坐像　等身大
　２．家具調度　実物
　３．家屋内説明図　３×３
　４．家屋内部写真　四つ切
五．第四ヂオラマ　運搬
　１．アイヌ古潭風景の背景　17×９
　２．薪を運ぶ女人形　等身大
　３．子供を背負う女人形　等身大
　　背負われた子供人形　等身大
　４．運搬の写真　四つ切
六．第五ヂオラマ　アイヌの狩猟
　１．森林の背景　15×９　10×９　10×９
　２．実物による森林表示　実材
　３．狩猟するアイヌの男二人　等身大
　　イ．弓による　実物
　　ロ．槍による　実物
　　ハ．仕掛け弓　実物
　４．熊　実物剥製
　５．アイヌ犬　実物剥製
　６．狐　実物剥製
七．第六ヂオラマ　織機
　１．家屋のある風景背景　15×９
　２．アツシを織る女人形　等身大
　３．敷物を編む女人形　等身大
　４．機織道具と材料　実物
　５．機織の写真　四つ切
八．アイヌ小屋別棟　五坪

図表３．北洋博アイヌ民族館予算書

科目	金額	備考
謝礼金	7,000	砂澤智一郎 一日一人 7,000 円(ママ)の割　10 日分
賃金	25,000	陳列ケース・資料撤去並に施設に要する賃金 一日一人 200 円の割　延 125 人分（5 人×25 日間）
背景制作費	50,000	木村撞司　描写坪数 10 坪　助手 2 名使用　延 20 日分 運搬の背景（コタン風景）10,000 円 餅つき・アイヌ楽器吹奏背景（林）10,000 円 狩猟の背景（秋の森林）10,000 円 熊祭りの背景（冬景色）10,000 円 織物の背景（コタン風景）10,000 円
パネル制作費	10,000	一枚（3 尺×6 尺）2,000 円の割　5 枚分
ケース運搬費	6,000	
アイヌ犬制製費(ママ)	20,000	一尾 20,000 円
狐制制製費(ママ)	20,000	一尾 20,000 円
写真	14,000	四ッ切（台紙付）300 円×30 枚 全紙大（台紙付）1,000 円×5 枚
熊制製		借用
アイヌ等身大人形	200,000	鈴木達 アイヌ男 3 体×20,000 円=60,000 円 アイヌ女 6 体×20,000 円=120,000 円 アイヌ子供 2 体×10,000 円=20,000 円
陳列装飾費	48,000	台　坪 3,000 円の割　15 坪分 45,000 円 袖・手摺 3,000 円
	400,000	

図表４－１．北洋博アイヌ館債務確定控

項目	金額	残額	伝票	備考
ヂオラマ請負費	297000	103000		ヂオラマ工事仕様書に297,360円の記載有り
謝礼金	7000	96000		S29.6.12付起案展示指導
賃金	25000	71000		木彫り熊実演
アイヌ犬	6000	65000	No.3	剝製製作
狐	14000	51000	No.2	剝製製作
写真	14000	37000	No.1	
アイヌ鉢巻	4000	33000	No.9	
イナウ	5000	28000	No.12	
長マット	9000	19000	No.17	
茅	2200	16800	No.4	
消耗品(N.19)	7409	9391	No.5-8·10·11·13-16·18·19	資材・塗料など
車輌	3600	5791		資料借用・返却？
車輌	510	5281		ケース運搬？
No.20·21·22	865	4416	No.20-22	消耗品・備品など
N23－25	1280	3136	No.23-25	消耗品・工事請負費など
N26－27	930	2206	No.26·27	消耗品
N28	2090	116	No.28	板硝子代

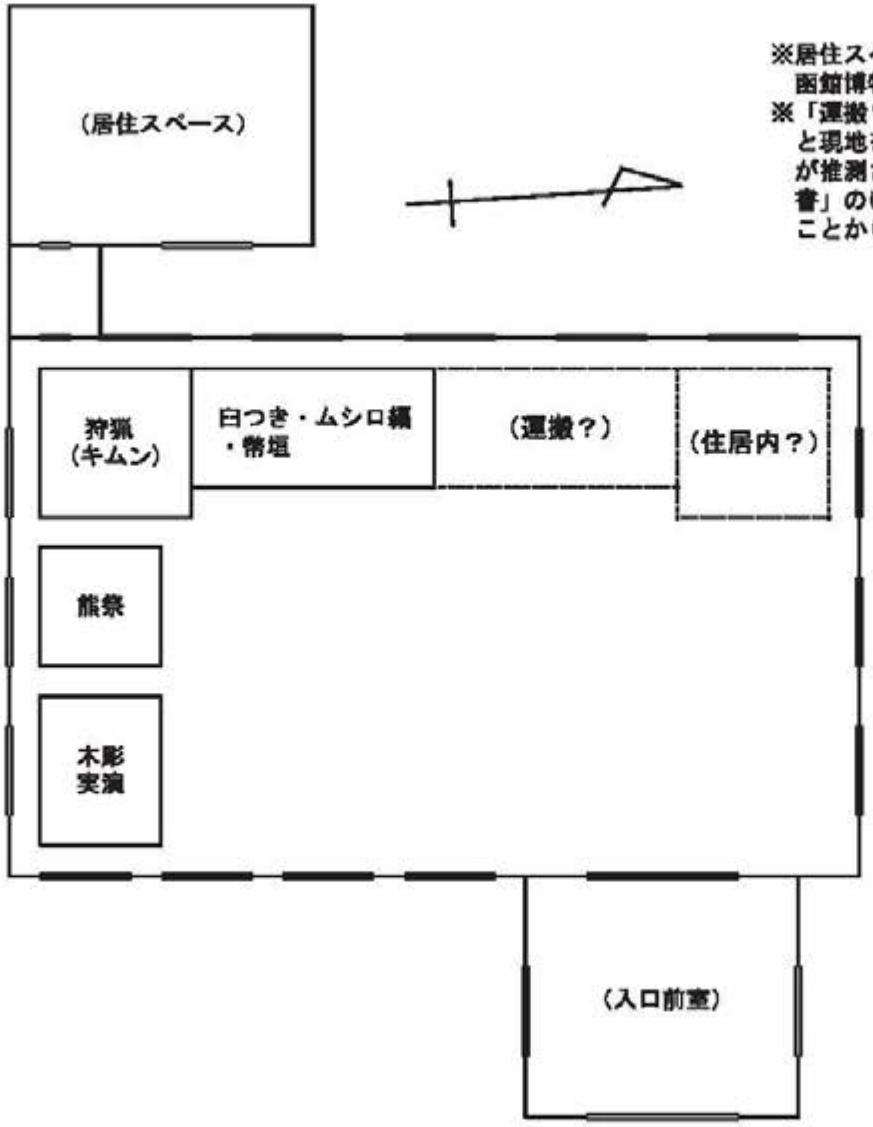
図表４－２．北洋博物品購入請求伝票

No.	起票		決裁		節	品名	形質	数量	単価	金額	摘要
	月	日	月	日							
1	6	21	6	24	手数料	アイヌ風俗写真焼付け料	台紙付四切	20	400	8000	(アイヌ民族館)
							台紙付全紙大	6	1000	6000	(アイヌ民族館)
2	6	30	7	2	備品費	狐剝製		1	14000	14000	アイヌ民族館ヂオラマ狩猟の部に陳列用
3	6	30	7	2	備品費	アイヌ犬剝製料		1	6000	6000	アイヌ民族館ヂオラマ狩猟の部に陳列用
4	6	30	7	2	消耗品費	茅	長9尺	11	200	2200	アイヌ民族館住居小屋に使用
5	7	2	7	5	消耗品費	胡粉		5	40	200	アイヌ民族館用
6	7	6	7	6	消耗品費	麻布		3	100	300	
7	7	6	7	6	消耗品費	茅簾	6尺×11尺	4	160	640	
						しゅろ縄		3	35	105	
8	7	6	7	6	消耗品費	麦粉		2	55	110	
9	7	7	7	13	備品費	アイヌ鉢巻		5	800	4000	アイヌ民族館用
10	7	7	7	16	消耗品費	ペイント	亜鉛用	1	850	850	
11	7	8	7	16	消耗品費	ポスターカラー	各色	80	45	3600	
12	7	12	7		備品費	イナウ		5	1000	5000	アイヌ幣物(消耗品)
13	7	9	7		消耗品費	壁紙		5	40	200	
14	7	9	7		消耗品費	更紙		30	4.50	135	
15	7	9	7		施設費	ビニール平行線		10	25	250	
						ダルマスイッチ		1	35	35	
16	7	9	7		原材料費	調ブチ	12×15	6	45	270	
						モール	6尺	12	12	144	
17	7	10	7	16	消耗品費	長マット	3尺巾	100	90	9000	
18	7	11	7	16	消耗品費	ポスターカラー	黒	10	45	450	
19	7	11	7	16	消耗品費	ラッカーエナメル	白1/12L	1	60	60	
						ラッカーエナメル	紺1/12L	1	60	60	
20	7	23	7	27	消耗品費	モール	6尺もの	5	15	75	
21	7	23	7	27	燃料費	木炭		1	540	540	
22	7	23	7	27	備品費	如露	5升入り	1	250	250	
23	7	31	8	1	消耗品費	シダ万年手箒		2	40	80	
24	7	31	8	1	消耗品費	蛍光燈反射■		1	200	200	
25	7	31	8	1	工事請負費	材料損料		1	635	635	
						取付料			200	200	
						手続料及検査料		1	165	165	
26	8	7	8	8	消耗品費	マツダ40W赤■		2	65	130	
						絶縁板		2	150	300	
27	8	7	8	8	消耗品費	麻布		3	100	300	
						胡粉		5	40	200	
28	8	18	8	19	消耗品費	板硝子	3.00×6.00	1	2090	2090	

床板の向きから見て建物南西側か。コーナー上部に題名が貼られている。
【函館市中央図書館所蔵】

木彫実演横。当初展示構想の「第一ヂオラマ熊祭り」のジオラマが見える。
【砂澤代恵子氏所蔵】

木彫実演。窓から見える松や石灯籠から建物南東のコーナーであることがわかる。
【函館市中央図書館所蔵】



※居住スペースを含む建物のサイズについては、市立函館博物館所蔵「第貳場図面」を参考にしている。
※「運搬？」については、函館市中央図書館所蔵写真と現地を比較したところ更なる展示スペースの存在が推測されたことと、背景工事の「内容」と「仕様書」のいずれにも「運搬の背景」が指定されていることから、仮に配置したものである。

図表５．アイヌ館模式図

建物北西か。当初展示構想の「第三ヂオラマ住居内部」にあたると考えられる。
【函館市中央図書館所蔵】

アイヌ館正面。看板に「アイヌ館」の文字が見える。
【函館市中央図書館所蔵】

図表６．北洋博アイヌ館展示写真一覧

	四ッ切写真		全紙写真
1	アイヌ住居前集合人物	1	アイヌ老人の横顔
2	住居内部	2	アイヌコタン全景
3	アイヌ男３人	3	アイヌ住居
4	~~アイヌ男子７人~~	4	アイヌ老婆
5	アイヌ男子マキリを下げて立った図	5	アイヌ墓標
6	半裸で煙草を吸ふ人物	6	アイヌ婦人（メノコ）のプロフィル
7	アイヌ男子の挨拶		
8	婦人３人		
9	アイヌ女子５人舟の横に居る図		
10	子供を背負った児童３人		
11	楽器をかなでる婦人と子供		
12	熊のおり		
13	舟をこぐアイヌ男子２人		
1	住居前でうすをつく婦人達		
2	アイヌ婦人うすをつく図		
3	アイヌ老人コタンに帰る図		
4	荷負網を頭よりかけた婦人		
5	アイヌ墓場全景		
6	熊の頭を祭った■		
7	子供をあやすアイヌ老婆		
8	アイヌ婦人盛装		
9	アイヌ老人正面よりの図		

※各項目左側に付された番号ならびに棒線消しは原文ママである。

（関係資料）

北洋博関係パンフレット－会場ごあんない【市立函館博物館所蔵:H14-191-02】

臼【市立函館博物館所蔵:民族 486】

杵【市立函館博物館所蔵:民族 477・478】

木幣【市立函館博物館所蔵:資料目録未掲載】

小刀【市立函館博物館所蔵:民族 266】

小刀【市立函館博物館所蔵:民族 267】

市立函館博物館　研究紀要　第25号
2015年３月31日　発行

編集・発行：市立函館博物館
〒040-0044　函館市青柳町17－１（函館公園内）
TEL. 0138-23-5480　FAX. 0138-23-0831
印　　刷：辻商事株式会社印刷部
〒040-0076　函館市浅野町４－15
TEL. 0138-40-0551　FAX. 0138-40-0424

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

No. 2 5

CONTENTS

Preface

MASAHITO OGAWA
"A History of an Ainu School established in Hakodate ; From the viewpoint of the Historical Study of the Education for the Ainu Children in Hokkaido."

SHOKO HARUKI
"The ema (a votive tablet) with an image of Ainu from the collection of Hakodate city museum"

KYOSUKE OYA
"AINU-KAN of Hokuyo Fair"

2015

Publisher : Hakodate City Museum
17-1, Aoyagi-cho, Hakodate, Hokkaido, Japan 040-0044
Phone. 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831